

ONLINE ISSN 2188-5451

薰物書の研究



創刊号

平成 26 年（2014）4 月

薰物書研究会 編

薫物書研究会会則

- 一、本会は、薫物書研究会（たきもののしよけんきゅうかい）と称する。
 - 一、本会は、現行の図書分類法で香書に分類される和書のうち、薫物の処方と調合法を主題とした薫物書（たきもののしよ）の研究を行うことを目的とする。
 - 一、本会は、右の目的を達するために、左の事業を行う。
 - 1 会誌「薫物書の研究」の発行
 - 2 その他必要と認められる行事
 - 一、本会の会員は、日本の薫物書に関する学術研究を行う者で、本会の趣旨に賛同するものとする。
 - 一、本会の会員のうち、日本の薫物書を主題とした研究業績（投稿時に所属した研究機関以外で発行された査読付き学術研究誌に掲載された学術論文、または博士学位論文）を持つ者は、本会の会誌に研究を発表することができる。
 - 一、本会には、役員として代表一名と監事一名を置く。
 - 一、代表は会の事務局を兼ねるほか、会誌の発行（年一回）等の事業ならびに総会（年一回）の開催を行い、監事は会計を監査する。
 - 一、役員の選出は選挙による。選挙は会員の互選とし、総会において行う。
 - 一、役員の任期は二年とする。ただし、再任を妨げない。
 - 一、本会に入会を希望する者は、住所・氏名・職業・業績一覧を記載して本会事務局へ申し込まなければならない。
- ### 付 則
- 一、会費は原則として無料とする。ただし、本会からの連絡に費用の発生する会員に対しては、実費の負担を求める場合がある。
 - 一、本会の会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。
 - 一、本会則は、平成二六年四月一日から施行する。

薫物書の研究 創刊号（平成 26 年）

目 次

徳川林政史研究所所蔵「薫物之方」翻刻 田中圭子 1-82 頁

.....

Study of Books on *Takimono* Vol.1(2014)

Content

Reprinted Text of *Takimono-no-hou* Owned by Tokugawa Institute for the History of Forestry

Keiko TANAKA pp.1-82

徳川林政史研究所蔵「薫物之方」翻刻

田 中 圭 子

解題

序

公益財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所には、旧蓬左文庫所蔵史料である尾張徳川家伝来の薫物書（たきもののしよ）二点が収蔵される。うち一点は本稿で翻刻する「薫物之方」一帖（折本、請求記号…三六・七）、もう一点は「衆香類集」一冊（横小本、同三六・五）で、書写年はいずれも未詳とされる（注一）。内容は、江戸時代前期以前に実在した皇族、公武の有力者等が考案ないし所持したと伝わる薫物の処方とそれらの調合法、ならびに薫香具の調製法から成る。

薫物とは、「沈香」や「丁子」、「麝香」を始めとする種々の香薬を細かく搗き碎いて和合し、「蜜」や「甘葛」といった粘り気のある甘味料で練り合わせるなどして丸薬状に仕上げ、香炉の炭火にかけて芳香を発散させたり、練り合わせずに散

薬状のまま包むなどして唐櫃に入れ、中の衣装や料紙にその芳香を移したりして用いたとされる芳香剤の一種である。我が国には奈良時代に交易品としてもたらされており、正倉院には当時の遺物も伝来する。薫物には用途や特徴、形状を異にする複数の種類があり、種類ごとに命銘される。いわゆる「六種（むくさ）の薫物」として知られる「梅花」や「黒方」等の六種類は丸薬状に仕上げる薫物で、それぞれの使用にふさわしい季節にちなんだ銘や言説を伴って伝来する。六種の薫物の他に、「薫衣香」という薫物もよく知られている。これは衣服や身体の臭気の解消、改善を目的に使用されたと伝わる種類で、用途に合わせて散薬状ないし丸薬状に仕上げて用いたと伝わる（注二）。

薫物の一種と見なされた芳香剤には、上記の丸薬状や散薬状のもの以外にも様々な形態の品があったらしい。例えば古い時代の薫物書には、香薬に動物性の油脂を混ぜ合せてこれを煎じ、油脂のみを抽出したという種類の処方や調合法も載録される。本稿で紹介する「薫物之方」のように比較的新し

い伝書にもこの種の処方¹は載録されるが、そこには古い時代の伝書には記されなかった形態や用法によるものも含まれる。散葉状の「薰衣香」を、美しい布地で作った小さな袋に納めて携帯する等した「掛香（匂袋）」や、香ばしく仕上げた油脂に蠟を配合して用いたとされる「匂玉」や「伽羅油」等（以上、第三章）がそれである。「伽羅油」は燭蠟として用いた品と考えられるが、「薰物之方」の時代にはこれもまた（「薰物」と見なされたい。新旧の薰物書を比較検討することで、我が国で薰物として定義されてきた芳香剤の多様性と変遷をうかがい知ることができる。

平安時代の類纂で、後の時代の薰物書の古典的規範として位置づけ得るであろう『薰集類抄』^{（注三）}や、轉法輪三条家^{（注四）}で室町時代中期以前に編まれたとされる『薰物故書』^{（注四）}のように、「六種の薰物」の方とその調合法を主体とした伝書をこの分野の（古典）と見なした場合に、「薰物之方」や「衆香類集」は、従来の（古典）に載録されず、室町中期以降の伝書における轉法輪三条実香の識語や跋文において「新調合之秘説」或いは「新作」と称された^{（注五）}薰物を始めとする新たな銘による薰物の処方とその調合法が、記述全体の半数近くを占める点で特徴的である。これらの銘の薰物は従来の研究で詳しく検討されなかった為、その発祥や実態、全容についてはほとんど明らかでない。後述するが、処方される香具の種類は従来の薰物と大きく異なることから、銘が新規なだけでなく、芳香の上での新しみも追求された可能性が高い。以下の本稿では、（古典）に載録されない種類の薰物を（新作薰

物）と称して考察を進める。

「薰物之方」と「衆香類集」の間には、記述内容に関する顕著な相違点の^{（注六）}見られる。一方で、同一ないしよく似た処方を確認できるなど、伝来の過程において影響関係にあった可能性を示唆する事例も散見する。こうした同類文の詳細については後述するが、両書を比較検討することは、それぞれの書誌や内容についての特徴と問題点を^{（注七）}解明しようとする上で有効と思われる。

以下の本稿では、「薰物之方」の書誌について、特に『薰集類抄』、「衆香類集」との異同に着目しながら考察する。

一 装訂と記載形式、本文の概要

「薰物之方」の装訂は折本で紺地金泥草絵表紙を使用し、裏表紙とも見返しには^{（注八）}正崩しの文様の地に丸に鳥の丸の文様一点を大きく刷り出した料紙を貼り合わせるほか、天地と小口に金を施す。大きさは縦約一六・三 cm、横約九・四 cmと小本に相当。本文は各紙面の山側の折り目を避けて筆写されることから、製本後に書き入れたものと見られる。本書の現状に外題、内題は見当たらない。『旧蓬左文庫所蔵目録』による表題「薰物之方」は、本文の冒頭一行目の記述を巻首題と見なし^{（注九）}て行われたものである。書中に類纂、書写の時期や当事者の特定につながるような跋文等は^{（注十）}伝わらない。

書中には、平安時代から江戸時代までの皇族、公家、武家の人物等にゆかりとされる薰物三種類の処方計一二八点、

【表1】「薫物之書」処方、調合法の掲出順・概要一覧

方・説通番	銘・項目名	由緒、概要等	書中と他書の同類方
方1	黒方	せんりうしのほうわうの薫物之方	
方2	黒方	六両合	
方3	黒方	四両合	
方4	黒方	八条式部卿宮ノ方	【薫集】方73.78.【薫】方56
説1	貝香こしらゆるやう		
説2	あまつらせんするやう		
方5	梅花		
方6	菊花		
方7	侍従	是はこゝろより外にちらさぬ方也	
方8	黒方		
方9	梅花		【薫】方121
方10	侍従		
方11	荷葉		【薫集】方32.【薫】方122
方12	黒方		
方13	はくさみ		
方14	はくさみ		
方15	はくさみ	又ノ方	
説3	合スル次第		
方16	はくさみ	又ノ方	
方17	はくさみ	又ノ方	
方18	薫衣香		
方19	薫衣香	又	
方20	薫衣香	小侍従ノ方	
説4	合する次第		
説5	合つきの事		
方21	黒方		【薫集】方60.64.65.66.81.83.84.【薫】方29.42.67
方22	侍従		
方23	梅花		
方24	梅花	すくなくわかちたる	
方25	荷葉		
説6	春ハ梅花夏ハ荷葉		
説7	薫物合やう		
方26	荷葉	又ノ方	
説8	合次第		
説9	いはぬ本か方なり		
説10	いはぬ本か方なり	又ノ方	
説11	いはぬ本か方なり	又ノ方	
方27	荷葉		
方28	荷葉		
方29	黒方	ちよくやう光源院	【薫集】方60.64.65.66.81.83.84.【薫】方21.42.67
方30	侍従		
方31	小倉		【薫】黒方方37
方32	黒方	近衛サマ	
方33	若草		
方34	黒方		
方35	黒方	公方様ノ方	
方36	黒方	中殿方	
方37	黒方	又ノ方	【薫】小倉方31
方38	黒方	又ノ方	
方39	黒方	又ノ方	
方40	黒方	五両合	
方41	黒方		
方42	黒方	勅方	【薫集】方60.64.65.66.81.83.84.【薫】方21.29.67
方43	黒方	勅方	
方44	新枕		
方45	新枕	勅方	
方46	新枕		
方47	富士		
方48	山人		
方49	新枕		
方50	梅花	勅方	
方51	荷葉		
方52	侍従		
方53	菊花		
方54	黒方		
方55	黒方		
方56	黒方		【薫集】方73.78.【薫】方4
方57	黒方		
方58	黒方	院御所様方	
方59	玉椿		
方60	有明(在明)		
方61	若草	長岡祐斎方	
方62	長月		
方63	黒方	院御所様より信長御相伝ノ方	
方64	初雪		
方65	梅花	小松院	【薫集】梅花方44.梅花方53
方66	梅花	小松院	【薫集】方2.3.6.9.10.16.18.21.26
方67	黒方		【薫集】方60.64.65.66.81.83.84.【薫】方21.29.42
方68	侍従		
方69	黒方		
方70	新枕		
説12	右沈香のはりやう、云々	方70の調合法	

方71	山人		
方72	春之夜		
方73	掛香		【衆】方4△、【薫】方109
方74	掛香		
方75	掛香		
方76	掛香		【衆】手枕方7
方77	ねみたれかみ		
説13	右大わう、云々	方78の調合法	
方78	ねみたれかみ	院御所様御方	
方79	ねみたれかみ	八条様方	
方80	ねみたれかみ	西三条殿方	
方81	霧谷		
方82	りんちやうき		
方83	山桜		
方84	すみやくら(隅櫓)		
方85	手枕		
方86	ねみたれかみ		
方87	ねみたれかみ	又ノ方	
方88	ねみたれかみ		
方89	寝乱髪:ねみたれかみ		【薫】掛香方108△
方90	梅花		
説14	但二年酒、云々	方91の調合法	
方91	梅花	勅方	
方92	梅花	院ノ御所様御方	
方93	梅花		【薫】方95
方94	梅花		【薫】方114
方95	梅花		【薫】方93
方96	梅花	大石方	
方97	梅花		
方98	梅花	勅方	
方99	薫衣香		
説15	口伝云、云々	方100の調合法	
方100	薫衣香	又方	
説16	右之方は、云々	方101の調合法	
方101	掛香	アへ	
方102	掛香	勅方	
方103	有明(在明)		
方104	竜煎香	院御所様	
説17	右薬しゆ、云々	方105の調合法	
方105	竜煎香		
方106	竜煎香	尾方	
方107	春日野		
説18	右三色を、云々	方108の調合法	
方108	掛香		【薫】寝乱髪方89△
方109	琴の緒(ヲ)		【衆】方4、【薫】方73
方110	八重一重		【衆】方1、方12
方111	ねみたれ髪		【衆】方2、方12、方46△
方112	匂玉		
方113	匂玉		
方114	梅花		【薫】方94
方115	匂之玉		
方116	匂之玉		
説19	右いつれも、云々	方117の調合法	
方117	兵部卿		
方118	花水		
説20	右十味、云々	方119の調合法	
方119	花水		
説21	此三色を、云々	方120の調合法	
方120	伽羅之油		
説22	右三種、云々(3.5.6行目)	方121の調合法	
方121	梅花		【薫】方9
方122	荷葉		【薫集】方32、【薫】方11
方123	菊花		
方124	侍従		
方125	仙人		
方126	焼物	前大相国	
方127	焼物		
方128	梅花	尾張	

- ・「薫物之方」に載録される処方を基準に、同書と「衆香類集」、『薫集類抄』に見られる同類文を集成した。
- ・【薫】は「薫物之書」、【衆】は「衆香類集」、【薫集】は『薫集類抄』の略号とした。

個別の方の調合法と薫物の具材となる個々の香葉の調製法計二二点を載録する。これらの記述の掲出順序ならびに概要は表1に示したほか、第三章と第七章において解説している。

処方の記載形式は、『薫集類抄』諸本などの比較的古い時代の写本や、江戸時代以降の類纂であつても皇室や公家に伝来したとされる写本の場合とは異なり、一行に香具一種類の名称と分量を記入するものとなっている。こうした形式は、江戸時代以降の書写と伝わる比較的新しい写本や伝書のうち、特に武家で書写されたと伝わるものに確認される。例えば徳川幕府初代將軍家康の自筆と鑑定される文書「香合覚書」(注七)における薫物方や、彦根藩主井伊家に伝来する茶道関係資料に抜き書きされた薫物方(注八)の記述は、「薫物之方」と同様の形式により行われる。書写者については不明であるが、広島藩主浅野家の家老上田宗箇の後裔である茶道上田宗箇流宗家に伝来する薫物書(注九)についても同様である。

一部の伝書の記載形式にこうした特徴の生じた時期や経緯については調査中であるが、江戸時代以降の武家の伝書に特徴的な形式であつた可能性は検討に値しよう。

二 成立と伝来

「薫物之方」の類纂時期やその当事者の特定につながるような跋文等は伝来せず、伝写本も探索中である。成立と伝来の問題を解明するには困難な状況にあるが、記述内容や記載形式を分析することにより、およその来歴を跡付けること

は可能かと考える。また、写本や逸文の発見の容易ならざるところは、秘伝の書として長く秘蔵された可能性を暗示する特徴として評価できよう。

表1と第三章の考察結果に明らかな通り、薫物の銘柄は、伝統的な「六種の薫物」に加えて室町時代以降の考案と伝わる「新作薫物」に該当すると考えられるものが多数載録される。

室町時代中期の撰集とされる『五月雨日記』の卷末「六種薫物合」の記述によれば、そこに載録された六種類の新作薫物の銘は、平安時代後期の『新古今和歌集』から室町時代前期の『新拾遺和歌集』までの勅撰集や鎌倉時代後期の私撰集『夫木集』に採録された和歌の表現と趣向に取材して行われたと云う(注一〇)。一方で、本書に載録される新作薫物の銘には、『古今和歌集』以降の勅撰集採録歌に由来すると見られるものや、地下の身分の歌人正徹による室町時代前期の私家集『草根集』の採録歌、平安王朝物語作品『源氏物語』の引歌として著名な和歌の表現と興趣に重なるものの他に、古代中国の有名な漢詩文や室町時代以降の謡曲、江戸時代前期の俳句といった和歌以外の内外の文学作品の表現と趣向に取材した可能性のある銘も見受けられる。こうした文学作品のうち、時代の最も新しいものは、元禄四年(一六九一)刊行の俳諧選集『猿蓑』の載録句である(11頁)。

処方の所有者ないし考案者のうち、特定可能な人物については、平安時代前期から江戸時代初期までの動静を確認することができ(21、30頁)。また、処方の同類文を探索した

ところ、この分野の古典的伝書である『薫集類抄』等に載録される処方と、同じ尾張徳川家に伝来した「衆香類集」の載録方に一致ないし近似するものを複数確認することができた。

薫物方の記載形式は、江戸時代初期に武家で類纂、書写されたと伝わる伝書のそれに通じていた。処方の配列は、戦国期から江戸時代初期に実在した法皇が所有ないし考案したと伝わる処方に始まり、本書の旧蔵先である尾張徳川家の所有ないし考案と見られる処方で終えられている(21、22、30頁)。処方や説の掲出順と伝承上の由緒、表現から推測できる由来ならびに記述形式の特徴に鑑みて、本書が尾張徳川家において蒐集された秘方秘説の江戸時代前期以降における類纂である可能性は高い。以上で概説した一々の特徴については、次章以降において詳述する。

三 薫物方

表1に示した「薫物之方」に載録される薫物三三種類の概要と、処方一二八点の内訳は、次の1から33に記した通りである。なお、それぞれの薫物の解説は、拙著『薫集類抄の研究・附・薫物資料集成』等の既存の研究成果を参考に、発祥の経緯と芳香の特徴を中心として行った。

1 黒方 二七点 方1、4、8、12、21、29、32、

34、43、54、58、63、67、69

いわゆる「六種の薫物」の一種。冬の寒さにも芳香が萎縮せず香り立つとされ、薫物の中でも特に優れた

種類と伝わる。一方で、実際の調査、使用は四季を通じて行われたらしく、四季通用の種類とも伝わる。「麝香」を多く入れて香りを強めた。『薫集類抄』は平安初期以降の皇族、公家の処方と伝わるものを載録。『源氏物語』等の平安王朝物語作品にも記述がある。

2 梅花 一九点 方5、9、23、24、50、65、66、

90、98、115、121、129

「六種の薫物」の一種。梅花の香りに擬えた芳香で、春に最もふさわしいとされる。「占唐」と「甘松」により清涼感のある甘さを表現したらしいが、平安中期ごろから「占唐」が希少化し、「樟脳」などの代替品が用いられるようになった。「黒方」と同様に由緒ある処方が『薫集類抄』に伝来し、平安王朝物語作品にも記述がある。後世の伝書には、新作薫物「新枕」(10)、「富士」(11)とともに「殊ニ秘方也」と評価されるほか、梅の実の仁を処方せよとの秘説が伝わる(注一)。

3 菊花 三点 方6、53、123

「六種の薫物」の一種。菊の香りに似た匂いとされ、四季のうち秋に位置する薫物とされる。『薫集類抄』は不知誰人の処方一点を載録し、平安時代中期の天皇や貴族にゆかりの種類と伝える。後世の伝書には実際の菊花を配合せよとの秘説が伝わる。

4 侍従 七点 方7、10、22、30、52、68、125

「六種の薫物」の一種。秋風がものさびしく吹いて心憎く感じられる時分の景趣によそえた芳香とされる。

異名を「拾遺」、「補闕」と言い、薫物の「百和香」の別名とも伝わる。「黒方」に同じく、実際の調査、使用は四季を問わずに行われ、四季通用の種類との伝承もある。「黒方」、「梅花」と同様に由緒ある処方が『薫集類抄』に伝来し、平安王朝物語作品にも記述がある。香りを特徴づける香具は「鬱金」や「麝香」で、後の時代には「乳香」とも伝わる。

5 荷葉 七点 方11、25、28、51、122

「六種の薫物」の一種。夏には殊に香ばしく匂い立ち、蓮の葉に擬えた香りと伝わる。『薫集類抄』には平安時代中期を代表する貴族階級の合香家の処方が載録され、蓮華の成分を抽出して配合した由が記される。平安王朝物語作品にも記述がある。

6 はくさみ 五点 方13、17

語彙、漢字表記とも不明。管見に本書の他には記載の無い銘であり、新作薫物の一首と考えられる。処方される薫香具の数は他の新作に比べて少なく、種類は従来の薫物と変わらない。処方通りに調合したとすれば、古風で素朴な香りと想像される。

7 薫衣香 五点 方18、20、99、100

時代や伝書によつては薫物「落葉」の代わりに「六種の薫物」の一つに数えられる。又の名を「躰身香」と言い、炭火にかけたり、袋に入れて温めて香りを発散させたりしたほか、口内や身体の臭気を解消、改善する目的で服用したとされる。形状は用途に応じて選

択されたらしく、袋に入れる場合は散葉状に、服用する場合は丸葉状に調合した由が伝わる。服用の処方には、当時の薫香具としては珍しい「桂心」などの薬種が記載される。『薫集類抄』には平安時代初期以降の和人だけでなく渡来人にもゆかりとされる処方や説が伝来。平安王朝物語作品にも記述がある。

8 小倉 一点 方31

新作薫物。管見では本書以外の薫物書に載録されない。『薫集類抄』の「黒方」に同一の処方が確認される。銘の由来は不明。『拾遺和歌集』巻第一七雑秋の小一条太政大臣歌「小倉山峰のもみぢば心あらば今ひとたびのみゆきまたなん」(注二)の一首に寄せた銘であれば、改銘に伴い興味も冬ないし四季通用から秋へと改めたか。

9 若草 二点 方33、61

新作薫物。管見に、文明七年(一四七五)に龍翔院三条公敦が類纂、書写したと伝わる伝書「薫物黒方秘方」(注一三)に載録するのが初見。同書の書写者識語には、同じ新作の「玉椿」(13)ともども公敦祖父の後白川入道右府公冬による「新調査之秘説」と伝わる。同様の伝承は皇室伝来の他書にも散見し、その中で、「若草」には「占唐」の代用品として用いられた「澤瀉(おもたか/タクシヤ)」を処方する点で特徴的であり、香ばしく匂ったとされる(注一四)。「若草」の銘に相応しいみずみずしさを表現しようとしたことが想像

される。

銘の由来は伝承に明記されない。「若草」を主題とした和歌は古くから数多く詠まれており、そうした和歌に取材して命銘された可能性は検討を要す。ただし、「若草」の語の著名な用例は和歌以外の文学作品にも存在し、香りと関連も伺えることから、命銘に最も影響した媒体の特定に際しては、和歌以外の作品も考慮の対象として検討を進めるべきかと考える。

例えば『源氏物語』では、若紫巻で北山を訪れた光源氏が「なにがしの僧都」の僧坊の小柴垣から若紫を垣間見る場面で尼君の詠んだ「生ひ立たむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えんそらなき」の一首などで、若紫を「若草」に喩えている。同じ巻の続く場面では、光源氏を迎え入れた僧都の僧坊の、篝火に照らされて清らかに美しい南面の室内に、空薫物が心憎く香り出て、名香の香りが匂い満ち、さらに源氏のただならぬ香りが追風となつて漂い出ている様子が物語られている（注一五）。

後述するが、三条家で考案されたと伝わる新作薫物のうち、「新枕」（10）は『源氏物語』の引歌と場面の情趣に寄せて命銘された可能性がある。同家で考案したとされる「若草」についても、同様の可能性を検討すべきであろう。

10

新枕 五点 方 44、46、49、70

新作薫物。「富士」（11）とともに「生脳」を処方し

て芳香を特徴づけたとされる。

管見に、文明七年（一四七五）、永正二年（一五〇五）ならびに同五年に書写を重ねたと伝わる轉法輪三条家の類纂の写し（注五）に記載される処方方が最も古い。

銘の由来は不明だが、『源氏物語』葵巻で光源氏が若紫と初めて契を交わした後に、二人の関係を内密にする目的で三日夜の餅を香壺の筥に入れて若紫の枕上に届けさせたこと、ならびに源氏が若紫を恋しく思うくだりで引かれた古歌「若草の新手枕をまきそめて夜をや隔てむ憎からなくに」に寄せて命銘された可能性は検討を要する（注一六）。

「新枕」は江戸時代初期の皇室でも珍重されたらしく、天和三年（一六八三）二月には、後西院から異母妹で近衛基熙室の常子内親王に対して、薫物「梅花」「新枕」「富士」の処方と調合法が直伝されている（注一七）。

11

富士 一点 方 47

新作薫物。同じ新作の「新枕」（10）ともども珍重された種類らしい。天正一七年（一五八九）二月一日付けの伝承によれば、室町時代に天皇への薫物伝授を拝命した合香家轉法輪三条家では調合せず、他家の方とされる（注一八）。江戸時代初期以降の皇室に伝来した薫物書には、新作薫物「仙人」（12）に「生脳」、「甘松」を加えて「富士」と号したとの説が「四辻伝」として載録される（注一九）。そのほかにも、後陽成天皇御

父陽光院の仰せとして後十輪院こと中院通村が書写したとされる一説に、「富士」は「黒方」に「生脳」を加えた品とも伝わる（注二〇）。

12 仙人（山人とも） 三点 方 48、71（以上山人）、方 125

新作薫物。『五月雨日記』の文明一〇年一六日付け「六種薫物合」には、銘と処方の由緒について「やま人の
おる袖にはふきくの露うちはらふにも千代はへぬべし。
右きくのつゆもおなじ歌にて名付られたり」とある（注
二一）。「仙人」の銘が『新古今和歌集』巻第七賀歌の皇
太后宮大夫俊成歌に寄せて付けられたこと、香りの趣
向が菊の香に擬えたものであったことが理解できる。
これを受けてか、後世の伝書には「仙人」は薫物「菊
花」から合せ出した種類と伝えるものが散見する。後
奈良院勅筆の写しと伝わる説には、「仙人」「有明」な
どの新作薫物は近年の考案であるが、「先皇」も度々調
合したとされる（注二二）。「先皇」は今上帝の先代以前
の天皇を意味する語だが、ここでは執筆現在から見て
直前に在位した帝と解釈するのが穏当であろう。後奈
良天皇の先代は後柏原天皇。薫物方を記した宸筆の巻
物を残したが焼失したとされる（同注）。後西院宸翰「薫
方之書」（注一七）にも処方が載録されており、室町時代
後期から江戸時代初期にかけて、最も珍重された薫物
の一つであったことが窺える。

13 玉椿（匂袋） 一点 方 59

新作薫物。銘の意味上の由来は不明。「玉椿」の語は

生命、権勢の長久をことほぐ和歌に詠まれることが多
く、そうした賀意を込めて命銘されたか。管見に、文
明七年（一四七五）に龍翔院三条公敦が類纂、書写し
たと伝わる「薫物黒方秘方」（注二三）に載録するのが初
見。同書の書写者識語に、新作薫物「若草」と「玉椿」
は公敦祖父の後白川入道右府公冬による「新調合之秘
説」とある。後奈良院宸筆の写しとされる伝承には、
「玉椿」が「入道相国家」で新たに調合した秘方であ
って、「先皇」はついに一度も調合なさらなかったとの
説が伝わる（注二四）。

14 有明（在明とも表記。薫衣香とも） 二点 方 60、103

新作薫物。伝承に、妙善院殿日野富子が夫足利義政
の忌中の長月九月に慰めとして薫物二種を調合し、そ
れぞれ「長月」「有明」と名付けたとされる（注二四）。『古
今和歌集』巻第一四恋歌四の素性法師歌「今こむとい
ひしばかりに長月のありあけの月をまちいでつるか
な」の一首（注二五）に寄せた命銘か。一説に「薫衣香」
の一種と伝わる（注二六）。室町時代以降の類纂と伝わる
複数の伝書に載録。

15 長月 一点 方 62

新作薫物。「有明」（14）に同じく妙善院殿日野富子
の命銘と伝わり、複数の伝書に載録される種類。

16 初雪 一点 方 64

新作薫物。「薫物之方」のみに載録される銘。『後撰
和歌集』巻第一四恋歌六の右近歌「身をつめば哀とぞ

おもふ初雪のふりぬることもたれにいはまし」などの表現に寄せて考案されたか。銘から初冬の景観、気候によそえた品と推察されるが、処方される薫香具の種類は『薫集類抄』や「薫物之方」の「梅花」、「荷葉」といった春夏の自然によそえた薫物のそれに似る。

17 春之夜 一点 方72

新作薫物。『古今和歌集』巻第一春歌上の躬恒歌「春の夜（よ）のやみはあやなし梅花色こそ見えねかやはかくるる」の一首（注二七）に取材して命銘されたとすれば、視覚の効かない闇夜に際立つて聞かれる梅の花の香りによそえた芳香か。

18 掛香（懸香とも） 七点 方73・76、101、102、108

「匂袋」の同義語。33「焼物」ともども特定の銘を記載せず「掛香」と称して載録。『薫集類抄』載録の古い薫物方とは異なり「沈香」、「貝香」を配合しない（19・24、27、29・32も同様）ことから、新作薫物として考案された可能性がある。

19 寝乱髪（匂袋。薫衣香とも） 九点 方77・80、86・89、111

新作薫物。江戸時代初期以降の伝書に載録される種類で、「匂袋」とも「薫衣香」の一種とも伝わる。「薫物之方」載録の「寝乱髪」方は、『薫集類抄』の「薫衣香」方のうち或方とされる服用の処方に対して、「沈香」、「貝香」を処方しない点において共通するが、新作にはそうした処方が少なくない。或方も含めて『薫

集類抄』に載録される「薫衣香」方とは配合される薫香具の種類が似ておらず、「衆香類集」載録の「薫衣香」方とも異なる。一方で、同じ「薫物之方」に伝わる「薫衣香」方99、100とはほとんど同じ種類の薫香具を処方する。ただし、同様の薫香具による処方は「薫衣香」以外にも確認できることから、処方以外にも用途や製法等の要素が「薫衣香」の場合と似ていた可能性を検討すべきかと考える。

他の多くの新作薫物の銘が和歌や物語に取材して行われたと見られるのに対して、「寝乱髪」の命銘は、それら以外の分野の作品における表現に影響を受けた可能性はある。「寝乱髪」の語の用例は、江戸時代初期以前の和歌や物語に確認できない（注二八）。一方で、金春禅竹作と伝わる室町時代発祥の能「玉葛」（注二九）には、「寝乱髪」の表現が次のように語られる。

払へど払へど執心のながき闇路や黒髪のあかぬや
いつの寝乱れ髪むすばほれゆく思ひかな（注三〇）

新作薫物「寝乱髪」が右の謡いの一節に寄せて命銘されたとすれば、寝屋でしどけなくなった長い黒髪から良い芳香の匂い立つよう、就寝前に髪への香り付けに用いたり、寝屋に常備したりする品であったと考えられよう。

20 霧谷 一点 方81

新作薫物。「衆香類集」には処方が載らず、「薫物之方」に一点のみ伝来。「沈香」、「貝香」を処方しない

(18「掛香」解説)。

「霧谷」という語は江戸時代前期以前の勅撰集歌に確認できない。『風雅和歌集』巻第九旅歌の花園院御歌「雲霧にわけける谷はすゑくれて夕日のこれる峰のかけはし」(注三二)や、正徹家集『草根集』の「嶺たかき梢は雨に色そひて谷の戸くらき秋の夕霧」(注三二)などの表現と景趣をもとにして考案された可能性を検討すべきか。

21 りんちやうき (漢字表記不明) 一点 方 82

新作薫物らしいが銘の語彙や表記は不明。「薫物之方」に処方一点のみが伝わる。「沈香」、「貝香」を処方せず(18「掛香」解説)「伽羅(黒沈香)」を使用。

22 山桜 一点 方 83

新作薫物。「衆香類集」と「薫物之方」に、薫香具の目方と種類の一致しない別々の処方が一点ずつ載録される。「沈香」、「貝香」を処方せず、新作に用いられることの顕著な「龍腦」、「茴香」、「生木香」などを処方する点に特徴がある。

銘の由来は不明だが、和歌に取材したとすれば、山桜の色あざやかさならぬ芳香の意味の「香」について詠んだ『続千載和歌集』巻第一春歌上の前参議雅有歌「山ざくら雲のはたての春風にあまつ空なる花のかぞする」の一首(注三三)などに寄せた命銘か。

23 隅櫓 (すみやぐら。角櫓とも) 一点 方 84

新作薫物。「薫物之方」に処方一点のみを載録。「沈

香」、「貝香」を処方せず、新作薫物の多くに処方される「龍腦」、「茴香」を配合する点で特徴的。

命銘の経緯は明記されない。歌語としての用例は管見に不明。俳語としては『猿蓑』巻之一に採録される史邦詠「蜀魂(ほととぎす)なくや木の間の角櫓(すみやぐら)」の一句(注三四)に用例が知られる。

24 手枕 一点 方 85

新作薫物。「薫物之方」に処方一点、「衆香類集」に三点を載録。「衆香類集」の方一点を除く三点の処方には「沈香」、「貝香」が配合されない。通常の薫物には六、七種類の薫香具を処方するが、「手枕」には一〇種類前後の薫香具が処方され、うち半数は「龍腦」等の新作薫物に顕著な香具である。処方にひときわ工夫の施された複雑な芳香で、調合の準備と手間も通常以上にかかったであろうことが窺える。

銘の由来は不明だが、和歌に取材したのであれば、『古今和歌集』巻第一五恋歌五の一首「秋ならでおく白露はねざめするわがた枕のしづくなりけり」(注三五)等に詠まれた情景と表現に寄せた命銘か。或いは、「新枕」(10)に同じく、『源氏物語』葵巻で光源氏が三日夜の餅を香壺の筥に入れて若紫の枕上に届けさせたこと、ならびに続く場面で引かれた古歌「若草の新手持をまきそめて夜をや隔てむ憎からなくに」に寄せて命銘された可能性も検討すべきかと考える。

25 竜煎香 三点 方 104、106

管見に「薫物之方」のみに載録される種類。銘は「りゅうせんこう」と読むか。香関係の類語として、マツコウクジラの腸内結石「龍涎香（りゅうぜんこう）」（注三六）と、それを処方した中国の薫香「龍涎香」（注三七）とがある。「竜煎香」には新作薫物に特徴的な薫香具の一つ「龍腦」が処方される。中国の薫香「龍涎香」にもおおむね「龍腦」を処方したらしい。

薫香「龍涎香」の処方は我が国の比較的新しい時代の伝書にも載録されるが、そこには「龍腦」は処方されない。例えば江戸時代以降の書写と見られる薫物書には、「龍涎香」方一点が次の通り記載される（注三八）。

龍涎香 糊之分両

一白檀 二兩

一車前子 三兩

一沈香 三分二朱

一丁枝 一兩

一鬱金 三朱

一青腦 二朱 煎テ

為糊丸かたさはねはる程也

同加薬

一甘松 一分 妙也

一麝香 一朱

本稿では、薫物「竜煎香」を「龍涎香」と区別して新作薫物の一種と見なすが、資料調査が進展した段階で、渡来品の可能性についても改めて検証したいと考

えている。

春日野 一点 方 107

新作薫物。後世の「新古御薫物秘伝書」にも処方が載録されるほか、銘のみが「薫袋伽羅薫物御目録」に記載される（注三九）。「新古御薫物秘伝書」の処方は「薫物之方」の方とは異なるが、「貝香」を処方しない点は同様であり、「或稻妻」と注記する。「稻妻」とは「薫物之方」に記載の無い新作薫物で、江戸時代前期以降の皇室や公家、寺社にゆかりとされる伝書に載録される。これらのうち、「新古御薫物秘伝書」の春日野（稻妻）方や「花案」（注四〇）載録の「稻妻」方には火薬の一種である「焰硝」少々が処方されている。「花案」の説によれば直火にかけて賞玩したと伝わる。火に焼かれれば火花を発したことから「稻妻」と命銘された可能性がある。

「薫物之方」の「春日野」方は薬種「車前子（シャゼンジ）」を処方する点に特徴がある。同書では本方のほかにこれを処方せず、「新古御薫物秘伝書」の同銘の処方にも配合されない。「車前子」は利尿作用を高める等の薬効が期待される生薬だが、薫物に処方した目的や効果は不明。「衆香類集」には新作薫物「アンヘル（安邊留）」に「車前子」が処方される。「アンヘル」という命銘は香具にも行われており、「鯨糞」を意味する。「鯨糞」は、我が国古来の薫物には処方されず（注四一）、比較的新しい時代の内外文化の影響を

受けて処方された可能性がある。

「春日野」という銘は『伊勢物語』や『古今和歌集』に載録される古歌「かすがのはけふはなやきそわか草のつまもこもれり我もこもれり」(注四二)等多くの和歌に詠まれて歌語として著名であり、銘の由来として特定の和歌を選ぶには困難がある。ただし、新作薫物「春日野」の異名を「稲妻」とする説、ならびに他書の稲妻と春日野の処方に焰硝の処方された点を鑑みれば、焰硝の放つ火花から『古今和歌集』巻第一春歌上の古歌「春日野の飛ぶ火の野守出て見よいまいくか有て若菜つみてむ」を連想して歌語を銘に借用した可能性を検討すべきであろう。

なお、安政二年(一八五五)に蓮観院より皇室に入覧した伽羅具の一覧とされる記述によれば、伽羅の名木をいう名香の一つに同銘の品があったとされ、そこでは春日山の神木杉から採取した香木をそのように名付けた由が伝わる(注四三)。

琴緒 一点 方 109

新作薫物。「衆香類集」と「薫物之方」に同じ処方が伝わる。薫物「掛香」の勅方⁷³もこれらと同一。「沈香」、「貝香」を処方しない代わりに「龍腦」等の新作薫物に特徴的な薫香具が配合される。

銘の「琴緒」については中国の伯牙、鍾子期にまつわる断絃の故事(伯牙絶絃)の一節に由来する慣用表現「琴の緒」「琴の緒断つ(ゆ)」が有名であり、この

表現を用いた和歌や物語の一節によそえた命銘の可能性を検討すべきかと考える。

28 八重一重(匂袋。薫衣香とも) 一点 方 110

新作薫物。「衆香類集」は三点の処方を載録し、うち一点は「薫物之方」載録方と同じものである。

管見に江戸時代初期以降の皇室、公家に伝来したとされる諸書に載録されることが多い。後西天皇宸翰と伝わる「薫方之書」(注一七)には「匂袋」の一種として処方一点が載録される。また、後水尾天皇皇女常子内親王の夫である近衛基熙の日記によれば、元禄一五年(一七〇二)六月三日、基熙は後西院より相伝した「薫衣香」方五種を東山天皇に伝授しており、そのうち一種類は「八重一重」であったと云う(注四四)。

「薫衣香」を散薬状に仕上げて特別製の小袋に納めた場合は「匂袋」とも称したのである。「八重一重」は江戸時代初期の皇室と有力貴族に愛好、珍重された、格の高い種類のひとつと理解できよう。

命銘は、この種類が「薫衣香」や「匂袋」として用いられたことを鑑みると、例えば『後撰和歌集』巻第三春歌下の兼輔朝臣歌「わがきたるひとへ衣は山吹のやへの色にもおとらざけり」(注四五)等の和歌によそえたものであったか。

29 匂玉(匂之玉とも) 四点 方 112、113、115、116

新作薫物。「衆香類集」、「薫物之方」ともに三点の処方を載録。「沈香」、「貝香」を処方せず、「龍腦」や

「アンヘル（鯨糞）」、蠟、「伽羅油」等の薫香具を配合。調合法として、「薫物之方」載録方116に付随の説19には、細かく搗き砕いた香具に溶かした蠟と油を混ぜ合わせて注ぎ込み、よく練り丸めて固まったところに、先のとがった竹で穴を開けるよう説かれる。穴の用途は明記されない。

近世の浮世草紙には、幕の端に「匂玉」を吊り下げた様子が記されている（注四六）。こうした用例を踏まえて、既存の辞書類は「匂玉」を「球形に作られた匂い袋。匂いの玉。」（注四七）などと解説する。ただし、右の説19を始めとした薫物諸書の説には、玉の形の小袋に詰める手順のあることについて言及されていない。

「匂玉」は江戸時代初期の皇族に調合され、武家との間で贈答されたことがあった。柳沢吉保の日記『樂只堂年録』宝永四年（一七〇七）九月一四日条によれば、吉保はこの日「花鳥和歌一帖及び勅製匂玉三」を拝領したと云う。宮川葉子氏はこの下賜について、「（吉保が）靈元院からの指導を得る度に、多額の金品類を「礼物」として捧げ続けていたから、院側からも靈元院歌壇のメンバーたちに書写させた歌書類や、右引用の「樂只堂年録」に「勅製匂玉」とあったように、靈元院自らが香合した薫物などが贈られていたのである。当該「十二月花鳥和歌」もそれらと同類の院の下賜品であったと考えられる」（注四八）と分析する。

「匂玉」の起源や伝来、実態については、江戸時代

30

の史料と文学作品、薫物書の伝承の記述を比較しながら慎重に検討し直す必要があるかと考える。

兵部卿 一点 方117

新作薫物。既存の古語辞書類には「兵部卿」について「香の名。絹の匂い袋に入れ身に着けて用いる。」（注四九）などがあり、「匂袋」の一種と定義される。「衆香類集」に四点、「薫物之方」に一点の処方載録。ほとんどの処方は「沈香」、「貝香」を処方しないが、「伽羅（黒沈香）」や「龍腦」、「伽羅油」、「家猪油」といった具材は配合。「衆香類集」の「兵部卿」方30に付随する調合の説5によれば、龍腦、麝香をよくすり合わせ、「家猪油」の中に菊の花を少し入れて煎じた後に漉して花を取り去り、その中に薫香具を入れて再びよくすり合わせて調合すると云う。

香具に油脂を混ぜて軟膏状の品を調合する処方は古くから知られており、平安時代の類纂と伝わる『薫集類抄』にも「潤面膏」や「甲煎方」の銘で載録される。顔面ないし身体に塗るものとされることから、美肌効果と体臭の改善を期待して使用された可能性がある（注五〇）。兵部卿方は「衆香類集」以外の伝書にも伝来しており、それらの調合法等について記した説には、漉して抽出した油脂を顔に塗って用いた由が伝わる（注五一）。この説によるかぎり、新作薫物「兵部卿」も同様の効果を期待して調合、使用されたものと考えられる。

銘の「兵部卿」は、『源氏物語』宇治十帖の主人公の一人である匂兵部卿宮に由来するのであろう。匂宮は、体から自然に芳香を発する薫に對抗して、薫物の蒐集と調合に熱中し、日々これを薫き染めて用いたとされる。命銘者は、薫の体香を目指した匂宮の姿に、身体に塗って体臭を改善するという行為との重なりを感じたのかもしれない。

29 「匂玉」の場合に同じく、新作薫物「兵部卿」の実態については、江戸時代の文学作品中の用例と薫物の記述を読み比べながら慎重に検証する必要がある。

花水 二点 方 118、119

新作薫物。「衆香類集」には伝来せず、「薫物之方」に二点の処方が記載される。「沈香」と「貝香」を処方しないが、「伽羅（黒沈香）」、「龍腦」等の新作薫物に顕著な薫香具を配合するほか、ナス科の落葉低木「枸杞（クコ）」の花らしき「枸杞薫」や「橘花」等を調合したとされ、完成品は梅花の如き香りがたと評されるほか、処方によつてはごま油三両と蠟二匁を加えるとの説も伝わる。以上のことから、「花水」は加熱すると液化化して良い香りのする燃料として調合されたかと考える。

銘の「花水」は「はなみづ」または「ケスイ」と読まれる仏教語で、仏花を生ける水を意味する。中世以降の謡曲に用例が報告されており、例えば観世流謡曲

「現在七面」に次のように謡われる。

御経読誦の折々に歩みをはこび花水（ルビ「ハナミヅ」）を佛に捧げ給ふ（注五二）

薫物「花水」が仏前供養の品として用いることを念頭に考案したとすれば、花と液体という連想から仏花を生ける「花水」の語を思いつき、これに重ねて命銘した可能性が考えられよう。

伽羅油（伽羅之油とも） 一点 方 120

「薫物之方」や「衆香類集」は、「伽羅（黒沈香）」から抽出した油脂を「伽羅油」と称して処方する薫物方を載録する。薫香具「アンヘル」が薫物の銘としても行われた（26「春日野」）ように、薫香具「伽羅油」もまた薫物の銘に転用されたらしい。具体的な用法、用途については調査中だが、蠟を配合することから、32「花水」等と同じく、加熱すると液化化して良い香りのする燃料として調合され、特別な席に使用された可能性はある。

「衆香類集」には「唐方」と伝わる処方一点が載録されることから、大陸に発祥した別の銘の薫物が本朝に伝来して改銘された可能性はある。「衆香類集」の他にも江戸時代以降の類纂と見られる伝書に散見。菊亭家に伝来して後水尾院をはじめとする江戸時代初期の皇族、貴族にゆかりの品とされる薫物方を載録した「萬方」（注二四）や、慶長一九年（一六一四）から翌年ごろに徳川家康が執筆したと見られる「香合覚書」

(注七)にも処方が載録されることから、江戸時代の公武において愛用、珍重されたようである。

33 焼物 二点 方 126、127

「焼物」は「薫物」の同音同義語。「掛香」(18)ともども特定の銘が併記されずに伝来した方の仮銘として記されたか。

以上の薫物のうち、1から5と7の六種類は『薫集類抄』以降の薫物書に載録されてきた伝統的な銘の薫物であり、18と33は特定の銘の代わりに一般名称として記載されたい。25には渡来品の可能性があり、これと1から5と7および33を除く種類は新作薫物と考えられた。伝統的な種類の掲出順序が早いことは、類纂者がこれらの種類を単に古いという以上に故実として尊重し、追従していた可能性を示唆する。特に、「黒方」の処方を冒頭に配した点からは、この処方がある皇族にゆかりと伝わる高貴な処方とされることも併せて、薫物の中でも「黒方」を最高の品として珍重する古来の伝統的価値観に適っている。

処方の数は「黒方」の二七点が最も多く、次いで「梅花」が一九点と顕著な値を示していた。これらの二種類を始めとする伝統的な種類の薫物は、新作薫物と比べて処方の数の多いのが特徴で、最も少ない「菊花」でも三点を数えた。『薫集類抄』等の伝承によれば、「黒方」は古来珍重された種類であり、次いで「梅花」、「侍従」に対する評価が高かったとされる。新作薫物は、処方の最も多い「寝乱髪」が九点で、これ

に「はくさみ」と「新枕」の五点、「勾玉」四点が続くという程度であった(注五三)。残る新作薫物のうち固有の銘を明らかにされない「掛香」等を除く一六種類については、それぞれ一点ずつしか処方が載録されなかった。

薫物への評価の違いや歴史の長短が、本書に載録される処方の数の多少や掲出順序に反映したかと考える。また、従来の合香家が、同じ種類のよく似た処方に試行錯誤を加えて芳香の微妙な違いを追求することを専らとしたのに対して、新しい時代の合香家は、それまでの薫物には用いられなかった薬種を配合してみるなどして芳香を斬新なものに改めてみたり、そうした趣向にふさわしい全く新しい銘を付けてみたりといったことを頻繁に行っていたようである。新作薫物の時代の合香家は、繊細な感覚を競い合うようにして行う調香活動と同時に、他者の芳香との違いがより鮮明に認識できるような創作活動に注力していた可能性が窺える。

四 処方の同類文の載録状況

「薫物之方」に載録された伝統的な種類の薫物(第三章、1・5・7)の方は、平安後期から幕末にかけて類纂されたと伝わる薫物書のほとんど全てによく似た、或いは同一の処方が載録される。『薫集類抄』によれば、これらの処方の大半は著名な合香家にゆかりの品と伝わるもので、世の好事家から珍重されて長く後世に受け継がれたと云う。「薫物之方」にも『薫集類抄』の処方の同類文が複数確認され、中には古

【表2】「薫物之方」『薫集類抄』処方載録状況一覧

書名	方・説通番	銘・項目名	由緒、概要等	書中と他書の同類方
薫物之書	方4	黒方	八条式部卿宮ノ方	【薫集】方73,78.【薫】方56
薫物之書	方11	荷葉		【薫集】方32.【薫】方122
薫物之書	方21	黒方		【薫集】方60,64,65,66,81,83,84.【薫】方29,42,67
薫物之書	方29	黒方	ちよくやう光源院	【薫集】方60,64,65,66,81,83,84.【薫】方21,42,67
薫物之書	方42	黒方	勅方	【薫集】方60,64,65,66,81,83,84.【薫】方21,29,67
薫物之書	方56	黒方		【薫集】方73,78.【薫】方4
薫物之書	方65	梅花	小松院	【薫集】梅花方44,梅花方53
薫物之書	方66	梅花	小松院	【薫集】方2,3,6,9,10,16,18,21,26
薫物之書	方67	黒方		【薫集】方60,64,65,66,81,83,84.【薫】方21,29,42
薫物之書	方122	荷葉		【薫集】方32.【薫】方11

【表3】「薫物之方」「衆香類集」処方載録状況一覧

書名	方・説通番	銘・項目名	由緒、概要等	書中と他書の同類方
薫物之書	方73	掛香		【衆】方4△.【薫】方109
薫物之書	方76	掛香		【衆】手枕方7
薫物之書	方109	琴の緒(ヲ)		【衆】方4.【薫】方73
薫物之書	方110	八重一重		【衆】方1、方12
薫物之書	方111	ねみたれ髪		【衆】方2、方12、方46△

- ・「薫物之方」に載録される処方を基準に、同書と「衆香類集」、『薫集類抄』に見られる同類文を集成した。
- ・【薫】は「薫物之書」、【衆】は「衆香類集」、【薫集】は『薫集類抄』の略号とした。

くからの由緒を留めるものも散見する(表2)。これらの方は、薫物方の古典的規範として長い間学び伝えられ、類纂者自身とその読者の間で珍重されたのであろう。

一方で、「薫物之方」の新作薫物で固有の銘の明らかな二五種類のうち、「若草」、「新枕」、「富士」、「仙人」、「玉椿」、「有明」、「長月」、「寝乱髪」、「山桜」、「角櫓」、「手枕」、「竜煎香」、「春日野」、「琴緒」、「八重一重」、「勾玉」、「兵部卿」、「伽羅油」の一八種類は、銘ないし処方が他書にも載録される。反対に、「薫物之方」以外の伝書に記載されない種類は、「はくさみ」、「小倉」、「初雪」、「春之夜」、「霧谷」、「りんちやうき」、「花水」の七種類であった。

ただし、他書に記載があるとは言っても、それらのうち「山桜」と「手枕」、「琴緒」の三種類については、「衆香類集」にしか記載されない。また、「薫物之方」と「衆香類集」の間には、新作薫物ならびに銘を伏せた四種類の薫物について、同一ないしよく似た処方を確認することができる(表3)。

「薫物之方」と「衆香類集」は、同じ尾張徳川家の蓬左文庫に伝来しただけでなく、類纂の過程において、源泉として同一ないしよく似た資料に依拠したか、一方が他方に依拠した可能性があり、検討を要す。

五 薫香具

「薫物之方」には、『薫集類抄』等の古典的伝書に記載の

【表 4】 新旧薫物書の薫香具一覧（63 番以降の香薬は『薫集類抄』に処方されないもの）

1	沈(ちん)	72	松脂	132	チウカウ
2	貝香(甲香)	73	菊花	133	ニクツク
3	丁子(チャウシ、母丁子)	74	三乃子(三奈、サンナ、サンナイ)	134	梅仁(梅ニン)
4	麝香(さかう)	75	大萸(大ワウ)	135	大莫
5	甘松(かんせう)	76	藕合油(そかうゆ)	136	トウリ
6	白檀	77	生木(生、生木香)	137	タイキヤウ
7	薰陸	78	杉もみち	138	ニンニンキヤウ
8	占唐(詹唐、セントウ)	79	伽羅	139	エンセウ
9	蜜	80	小豆	140	白梅シ
10	鬱金(右近)	81	前胡	141	生クハツ
11	藿香(霍香)	82	菖蒲	142	墨
12	甘松香花(甘松花)	83	麝香ノ臍ノ皮	143	枸杞薑
13	安息香(あんそく、あんそつかう)	84	使君子	144	枇杷皮
14	甘葛	85	蠟(羅ウ、唐蠟)	145	ハヲシロイ
15	藕合	86	伽羅脂(伽羅ノ脂、伽羅油)	146	トウノツツチ
16	青木香	87	輕粉	147	杉ヤニ
17	白芷	88	家猪油	148	ニツケイ
18	零陵香(レイリヤウカウ)	89	白粉	149	梅
19	当帰(当飯、トウキ)	90	雷丸油		
20	桂心	91	荊棘花(山ノ棘ノ花)		
21	檳榔子(檳榔)	92	梅花		
22	丁枝	93	玉		
23	香附子	94	小腦		
24	艾納	95	白芨		
25	乳香(乳頭香)	96	炭(すみ)		
26	白膠	97	塩		
27	沈底	98	梅ノ木ノ霜		
28	甘草	99	椿油		
29	瓜子	100	アンヘル(アンヘラ; 鯨の糞)		
30	大棗(棗)	101	ライクハン		
31	松皮	102	甘松節		
32	苜蓿香	103	白シホリノ油		
33	茅香	104	山梔子		
34	澤蘭	105	芎藭		
35	酥油(酥)	106	独活		
36	鵝梨汁	107	藁本		
37	海塩花	108	良薑		
38	馬牙消	109	角茴		
39	柳汁	110	連翹		
40	丁香(チャウ香)	111	黄芩		
41	風香膏	112	兜婁香		
42	淺香	113	柏木末		
43	酒油(? 酒、油か)	114	榆皮麪		
44	龍腦(龍、りうなふ)	115	白梅花		
45	煎香	116	油		
46	白附子	117	棋楠		
47	伏苓	118	車前子(シヤゼンシ)		
48	白朮	119	糠の黒焼		
49	白欝	120	沈束香		
50	雞舌	121	伽羅粉		
51	蒿根	122	かまのほうわう		
52	麻黄根	123	家(? 油の一種か)		
53	滑石	124	懺香		
54	粉英	125	二之香		
55	生結香	126	線香		
56	藿香葉	127	シウコン		
57	草茅香	128	苦練香		
58	麻黄	129	川芎		
59	乳香纏	130	シシキヤウ		
60	焙硝	131	タイキヤウ		
61	乾糖				
62	湿糖				
63	木香				
64	良香(良かう)				
65	阿仙薬(あせんやく)				
66	茴香(ウイキヤウノ大茴香ノ八角)				
67	排草(ハイサウ)				
68	辛夷(シンイ、しんゐ)				
69	反腦(ヘン)				
70	樟腦(セウ腦)				
71	片腦(片)				

無かった薫香具が多数記載される。こうした新たな薫香具については、管見に名称の表記や薬種を特定できていないものが多く、それぞれの薫香具が薫物の芳香に及ぼす影響についても調査中である。

『薫集類抄』に記された薫香具は六二種類を数える。ただし、「蜜」と「甘葛」は練り合わせの為の（つなぎ）として使用されるが処方に明記されることはほとんど無い為、この二種類を除けば六〇種類となる（表4）。これに対して、「薫物之方」の薫香具は「蜜」、「甘葛」を除いて六七種類にのぼり、それらのうち一九種類は『薫集類抄』にも処方されたもの、残る四八種類は『薫集類抄』に処方されなかったものである。

以上の集計結果に、「薫物之方」と同じ旧蓬左文庫所蔵の薫物書で処方の重複も散見する「衆香類集」の内容を加えて集計し直したところ、三書に処方される薫香具は一四九種類にのぼった。そのうち四六種類は三書のうち二書に共通して処方された薫香具であり、『薫集類抄』のみに確認できた香具は三八種類、「衆香類集」のみの香具は三九種類、「薫物之方」のみの香具は二六種類をそれぞれ数えた。

また、『薫集類抄』での使用頻度が「薫物之方」「衆香類集」の処方では逆転する場合も見られた。『薫集類抄』で頻繁に処方されていた「占唐」は「薫物之方」などでほとんど使用されなくなる。また、『薫集類抄』では渡来の品と伝わる薫物に稀に処方されていた「龍腦」や、『薫集類抄』には名前の見えなかった「樟腦」と沈香の極上品「伽羅（黒沈香）」が、「薫物之方」では多くの薫物に処方されていた。

処方されることの稀な香具の記載状況を薫物の種類別に見た場合、『薫集類抄』に独自の香具の大半は、「梅花」、「荷葉」、「菊花」、「侍従」、「落葉」、「黒方」のいわゆる「六種の薫物」以外の種類に処方されることが分かった。これらは中国渡来の処方との伝承を伴ったり、薫香具の数と目方が多くて複雑な処方であったりという場合がほとんどである。

一方で、「薫物之方」や「衆香類集」の薫物のうち、『薫集類抄』には記載の無い香具を処方する種類は、主として新作薫物である。また、新作薫物の中には、いわゆる「六種の薫物」を始めとした伝統的な種類の薫物の香りの方向性を担ったはずの「沈香」と、臭気によって良い香りを際立たせる働きを持つ「貝（甲）香」の二種類を処方しない種類が少なくないことも分かっている。「薫物之方」の新作薫物のうち、例えば「寝乱髪」と「勾玉」には、『薫集類抄』での使用頻度の高い「沈香」、「貝香」の二種類がほとんど処方されないが、『薫集類抄』では使用頻度の低い「龍腦」や、記載の無かった「伽羅（黒沈香）」、「木香」、「良香」、「阿仙薬」などの新しい香具が処方されるのである。

「占唐」と「龍腦」、「樟腦」の交替は、平安中期以降に手に入りにくくなった「占唐」の代替品として「龍腦」や「樟腦」を用いたために生じたとされる（注五四）。また、「伽羅」の登場と汎用化は、室町時代以降に「伽羅（黒沈香）」を一般の「沈香」と名称ともども区別して珍重したことによるのであろう。

「沈香」と「貝香」は、当時においても調達可能な香具で

あった。「占唐」の代用品として「龍腦」や「樟腦」が処方された場合とは状況が異なる。「沈香」、「貝香」を処方しない新作薫物については、ある特別な意図、例えば（従来とは異なる香具により新たな香りを世に出したい）との構想のもとに考案された可能性を検討すべきかと考える。

六 調合法

「薫物之方」が載録する処方の調合法ならびに香具の調製法を記した諸説は二二点で、その半数は特定の処方の調合法として伝わるものである（表1）。

香具の調製法は「貝香」と「甘葛」に関するもので、それぞれに項目立てて説を記述している。これらの項目は、『薫集類抄』以降の比較的古い伝書に概ね共通して載録される。調製法の諸説のうち筆頭に置かれるという点も、これらの古い伝書の類纂形式に通じている。ただし、「合スル次第」以降の項目の種類は『薫集類抄』等に比べて格段に乏しい。

項目立ては先行する主要な薫物の伝書を参考に決定されたらしいが、調合手順のうち、難度が高く指南を要するものや、必要不可欠なものに絞られたとの印象を与える。

第三章で述べたように、「沈香」と調製法の掲載される「貝香」とは、多くの新作薫物に処方されない薫香具である。それにも関わらず「貝香」の調製法が載録された理由として、「貝香」が薫香具の中でも特に調製に時間と手間のかかるものであり、合香上の特記事項として古くから珍重されてきた

ことを考慮すべきかもしれない。

さて、薫香具と調合法に関する諸説については、どの伝書にも似たような内容が記されており、源泉の推定を困難にしている。時代や書承関係の先後の明確な伝書同士の記述を比較すれば、その時々の実情に応じた試行錯誤の痕跡と、その積み重ねによる説の変遷を明らかにすることができるかもしれない。この問題点については、諸書の資料研究成果が蓄積した段階で、改めて取り組みたいと考えている。

前述の通り、調合法の項目数と記述の分量は、『薫集類抄』や『薫物故事』に比較して格段に少ない。また、両書は処方と説とをほぼ均等に載録してそれぞれに独立した巻を構成するのに対して、本書の説は処方と処方の間に断続的に配置される。また、香具の調製法と調合の手順に関する一般的な説は全体から見ても前半に配置されており、残る個々の処方に対する説が後半に集中している。以上の現状から、類纂者が調合法を内容、目的ごとに二種類に大別した上で掲載位置を決定したらしきことが窺える。

本書は処方を主体とした類纂と見られるが、調合時に特に手間のかかる「貝香」や「甘葛」の調製法や、どの薫物を調合する場合にも共通して行われる手順については記載している。それらの掲載は、『薫集類抄』や『薫物故事』ほど網羅的に行われたのではないにせよ、説の重要性を考慮しながら、ある程度の分類意識に基づき行われたと解釈できそうである。

薫物書の（古典）を規範として尊重し、その形式と内容に倣いながら重要かつ必要最低限の調合の説を載録することに

より、合香指南書としての機能性と有用性を備えた内容に仕上がっていると評価できよう。

七 方・説の由緒と依拠資料、類纂形式

「薫物之方」には、載録される処方や調合法、香具に関する説の元の所有者ないし考案者、ならびに出典といった、由緒や依拠資料に関する記述が複数点残されている(表5)。こうした記述は、本書が類纂されたおおよその時期や、内容上の特色を考察する上で重要な示唆を与える資料である。

本章では、載録された処方や説の由緒ならびに掲出順序について分析することにより、本書が類纂された目的や意義について考察する。

本書に処方の所有者ないし考案者に関わるものとして記載された一八名の人名または家名、および説の依拠資料に関する一点の記述の概要は、表5に示した書中における記述の掲出順に1から19として解説した通りである。

1 せんりうしのほうわう 巻首題「薫物之方」の次行・黒方」方1の直前に記載。

泉涌寺の法皇。生前に太上法皇となり京都泉涌寺山の月輪陵に葬られた人物ならば、後水尾天皇と明正天皇のいずれかに該当する。後水尾天皇は徳川幕府二代將軍秀忠女和子を後宮に迎えて女御、中宮とし、和子との間に女一宮の明正天皇以下五人の皇子・皇女を

【表5】「薫物之方」処方・説の由緒・依拠資料一覧

方・説通番	銘・項目名	由緒、概要等	書中と他書の同類方
方1	黒方	せんりうしのほうわうの薫物之方	
方4	黒方	八条式部卿宮ノ方	【薫集】方73.78.【薫】方56
方20	薫衣香	小侍従ノ方	
説9	いはぬ本か方なり		
説10	いはぬ本か方なり	又ノ方	
説11	いはぬ本か方なり	又ノ方	
方29	黒方	ちよくやう光源院	【薫集】方60.64.65.66.81.83.84.【薫】方21.42.67
方32	黒方	近衛サマ	
方35	黒方	公方様ノ方	
方36	黒方	中殿方	
方42	黒方	勅方	【薫集】方60.64.65.66.81.83.84.【薫】方21.29.67
方43	黒方	勅方	
方45	新枕	勅方	
方50	梅花	勅方	
方58	黒方	院御所様方	
方61	若草	長岡祐斎方	
方63	黒方	院御所様より信長御相伝ノ方	
方65	梅花	小松院	【薫集】梅花方44.梅花方53
方66	梅花	小松院	【薫集】方2.3.6.9.10.16.18.21.26
方78	ねみたれかみ	院御所様御方	
方79	ねみたれかみ	八条様方	
方80	ねみたれかみ	西三条殿方	
方91	梅花	勅方	
方92	梅花	院ノ御所様御方	
方96	梅花	大石方	
方98	梅花	勅方	
方101	掛香	アヘ	
方102	掛香	勅方	
方104	竜煎香	院御所様	
方106	竜煎香	尾方	
方126	焼物	前大相国	
方128	梅花	尾張	

- ・「薫物之方」に載録される処方を基準に、同書と「衆香類集」、『薫集類抄』に見られる同類文を集成した。
- ・【薫】は「薫物之書」、【衆】は「衆香類集」、【薫集】は『薫集類抄』の略号とした。

儲けた。

記述の配置と形式から、方1から3と説1、2の所有者として名前があがるのか、或いは「薫物の方」と総称された本書全体の方・説の所有者として記載があるのかは判断し難い。いずれにしても、本書では巻頭に近世初期の太上天皇の秘伝とされる処方が掲載されたことになる。

後水尾天皇皇女で明正天皇の妹に当たる常子内親王による『无上法院殿御日記』や、常子の夫である近衛基熙の『基熙公記』によれば、後水尾天皇は合香活動や秘方の伝授に熱心に取り組んでおり、明正天皇も後水尾天皇の御所で行われる合香活動に参加している（注五五）。東山御文庫を始めとした各所には、後水尾天皇の秘伝とされる薫物の方や調合の説を記載した薫物書が複数伝来する（注五六）。方1の同類文と明正天皇ゆかりと伝わる秘説は管見に知れない。

八条式部卿宮 「黒方」方4の直前に記載。

仁明天皇皇子八条式部卿宮本康親王。『源氏物語』梅枝巻に紫上が調合した薫物方の元の所有者として名前の見えるほか、『河海抄』等の古註釈書や『薫集類抄』等の多くの薫物書にもゆかりの品とされる薫物方や調合法が複数点記載されるなど、平安初期の合香家のうち最も高貴で著名な人物の一人。『薫集類抄』等の伝承によれば、「不伝男（男に伝へざれ）」との御禁制を伴う父帝ゆかりの「侍従」方40・41を継承。秘方秘説は

後裔の八条大将藤原保忠や平随時に伝来したほか、後世の合香家に長く学び伝えられたとされる（注五七）。

本書の「黒方」方4は、『薫集類抄』の「黒方」方66等の八条宮ゆかりと伝わる処方に対して、「丁子」の目方がわずかに異なるほか、目方の加減に関する説に異同が見られる。古い時代の他書に伝わる八条宮の「黒方」方とも完全には一致しないことから、伝来の過程において生じた異伝であるかと考える。

なお、『薫集類抄』「黒方」方66は、方に付随の或説に「至要方」と呼ばれ、延喜六年（九〇六）二月三日に典侍滋野直子朝臣がいづれかに献じたと伝わる。直子は同日に上記の「侍従」方40・41も献上しており、それらは仁明天皇の御禁制を伴う秘方であったとされる。「黒方」方66を「至要方」と呼ぶ意味については明記されないが、伝承の内容が正しければ、仁明天皇ゆかりの「侍従」方に並ぶ重要な処方として伝来した可能性は高い。

小侍従 「薫衣香」方20の所有者として記載。

「薫衣香」方20は「小侍従ノ方」とされ、小侍従なる人物が考案ないし所有した処方と伝わる。小侍従と呼ばれた合香家については調査中である。

「薫衣香」方20と『薫集類抄』載録方とを見比べてみると、同じ「薫衣香」同士では薫香具の種類だけでなく分量も大きく異なるのに対して、「黒方」方とは薫香具の種類に共通するものが多く、分量についても同

程度に処方されていることが分かる。

『薫集類抄』によれば、「黒方」は又の名を「薫衣香」と云ったとされる。小侍従の方には「薫衣香」に特徴的な薬種も配合されないことから、「黒方」の処方をもとに工夫を加えて「薫衣香」として使用するようになった可能性を検討すべきかと考える。

4 いはぬ本 説9・11の出典として記載。

細かく搗き碎いた薫香具を和合する順序についての心得、道具の種類と用法、和合に適した時期や季節ごとの手加減といった事柄についての説三点の出典として見える。

書名を「いはぬ」こととした経緯として、伝来の過程で忘れられたか、或いは守秘すべき事項として意図的に伏せたかの可能性を検討すべきであろう。同類文や趣旨を同じくする説は『薫集類抄』等の諸書に散見することから、「いはぬ本」の特定は現段階では困難であるが、同時代の伝書の資料研究成果が蓄積した段階で、詳しい本文分析を試みる予定である。

5 ちよくやう光源院 「黒方」方29の所有者として記載。

「ちよくやう」は勅様か。天皇の薫物調合のなさり様の意味に解釈できるとすれば、天皇にゆかりの薫物方を意味する「勅方」の類義語として記載されたか、或いは誤伝の可能性がある。

光源院は山城相国寺にある僧院。足利幕府第十三代將軍義輝はここを菩提寺として光源院と号した。義輝

父は足利幕府十二代將軍義晴、母は近衛尚通女で義晴の没後に慶寿院と号した。「勅様、光源院」の薫物方とは、いずれかの天皇が光源院こと義輝に下賜した処方を意味した可能性がある。義輝の所持した可能性のある薫物方や調合の説は、本書以外に伝わらない。

皇族から公武に対して薫物を下賜することは、伝承によれば平安時代から既に行われており、室町時代の皇族、貴族らの日記等にも歴代天皇による同様の贈答が頻繁に記録されている。薫物は、優美で高価な贈答品であり、由緒によつては秘伝の名方としての付加価値も伴うことから、重要な相手と贈答するにはふさわしい特別な品であったのだろう。

『御湯殿上日記』永禄八年（一五六五）三月二日条によれば、義輝は正親町天皇より御薫物の下賜に与っている。正親町天皇は即位前から皇室の親族や臣下との間で頻繁に薫物を贈答している（注五八）。薫物書には正親町天皇にゆかりの処方や調合法と伝わる記述が散見するほか、天皇の親族にも父帝後奈良院や皇子の後陽成院を始めとして、合香に取り組んだとされる人物が複数名ある（注一四）。正親町天皇は当時の皇室を代表する合香家の一人であった可能性が高く、直々に調合した薫物を贈って珍重されたものと想像される。

6 近衛サマ 「黒方」方32の直前に記載。続く「若草」方33も「近衛サマ」の方として載録か。

「黒方」方32を所有しないし考案した人物。本方には

「ソノ」と呼ばれる薫香具が処方され、香薬「薫陸」の異名であると併記される。「ソノ」は続く薫物「若草」方33にも記載があり、管見に以上の他の用例は確認できていない。「黒方」方32と「若草」方33は、本書の依拠資料において「近衛サマ」の処方として伝来し、本書の類纂時に共に載録された可能性が考えられる。

陽明文庫には近衛家に伝来した薫物の伝書^(注五)のほか、薫物を題材とした後陽成天皇御製「春なから落葉か中の黒方は時わかぬ富士の雪にたとへん」をしたためた宸翰の書状も収蔵される。また、各地に伝わる薫物書には、近衛家ゆかりの処方と称する薫物方が散見する。東山御文庫などに伝来する薫物書にも近衛家ゆかりの秘方と伝わる処方は載録されており、それらの中には「黒方」や「若草」の処方も含まれるが、本書の方と一致する処方は確認できていない。

前節で確認した通り、室町時代の近衛家当主尚通は、足利義輝から薫物を贈られている。この事を始めとして、近衛家では、室町時代以降も皇族や公武の有力者との間で薫物を贈答したり、合香や伝授といった活動を行ったりしたことが記録されている。例えば近衛基熙の日記『基熙公記』寛文五年（一六六五）一月七日条によれば、伏見宮貞致親王に嫁した基熙姉好君（よしぎみ）の新殿移徙の翌日に、関東に下向する京都所司代水野石見守への「銭」、餞別の品として、茶道具一箱の他に應山こと基熙祖父信尋と基熙父の長山尚嗣等

が調合した薫物「梅花」「新枕」「黒方」の三種類が遣わされたという。三種のうち「黒方」は應山信尋の調合した品とされる^(注五九)。尚嗣は残る二種類のうちいずれかを調合したのであろう。「新枕」は新作薫物である（8頁）。

同じ日記の元禄一五年（一七〇二）六月一日、三日条には、基熙が東山天皇の勅命により参内し、後西院から正式な伝授という程ではないが伝えていたという「薫衣香」の新作五種類の処方を御前で調合し、処方や調合法の秘伝を残らず申し入れたとある。新作の銘は「山吹」「八重一重」「潤紅」「ねみたれかみ（寝乱髪）」「臺（ウテナ）」と記載される^(注六〇)。

宮内庁書陵部所蔵後西院宸翰「薫方之書」^(注一七)には、右の五種類のうち「八重一重」「閨（潤）紅」「寝乱髪」「臺」の四種類の処方が「匂袋」の方として記載される。「山吹」は管見に専修大学図書館菊亭文庫所蔵「萬方」^(注二四)のみに載録される新方で、そこでは「サラシナ」「ウテナ」「九重」「潤香」「神路のおく」とともに「法皇御方六種」と伝わる。これらの処方のうち、「潤香」のほぼ同じ目方の処方が高松宮本「薫物（ノコト）」^(注一九)に載録されており、そこでも「にはひ袋」の方と伝わるほか、処方の由緒として「後水尾院御本玉垣局書写云々」（3丁裏）とある。玉垣局は、後水尾院皇子で後西院弟皇子である靈元天皇の第一皇子栄貞親王こと知恩院門跡尊胤法親王の生母で、「玉

垣」「少納言局」等と称した秦重仲女仲子（注六二）の可能性がある。以上のことから、「萬方」の「法皇」もまた後水尾院に比定する。

基熙が所持した後西院ゆかりの新作薫物五種類のうち四種類は後西院宸翰にも記載されるほか、残る一種類の「山吹」を含む三種類については、薫物書の伝承に後西院父帝の後水尾法皇も処方を持した由が伝わっていた。後西院は父帝に薫物を学ぶことがあり、そうして得た方を基熙に何らかの形で開示したのかもしれない。なお、五種類の新作が「薫衣香」とも「匂袋」とも呼ばれるのは、散葉状に仕上げた「薫衣香」を「匂袋」の具材に利用した為かと考える（13頁）。

近衛家には皇室の薫物方を正統な継承者として相伝し伝授された人物もある。基熙の正室で後水尾院皇女品宮常子内親王の『无上法院殿御日記』天和三年（一六八三）二月二四日、二九日条によれば、品宮は両日に実兄後西院の御所へ参入し、勅作の薫物「梅花」「ふじ（富士）」「新枕」の処方伝授に与り、御前で調査したという（注六二）。このこと以前にも、天皇や上皇らの御所に参内して、父帝をはじめとした皇族らによる薫物調査を手伝ったり、父帝らと薫物の贈答を行ったりしており、当時の上層社会における女流の合香家の中でも信望が篤く、技量において高く評価されていたものと推察される。

基熙と常子の間に生まれた家熙もまた薫物を調査し

たほか、両親ともども朝廷から「匂袋」を下賜されたり、餞別の品や引出物として贈ったりしている。例えば、当時の薩摩や琉球の文書には、家熙が琉球の程順則から贈られた品物の返礼として薫物を贈ったことが記録される（注六三）。家熙の言説を聞き書きしたとされる『槐記』には、当時の上層社会における茶の湯の席での薫物使用のあり方についての家熙の批判的見解が記されている（注六四）。家熙は、両親を始めとした近衛家代々の合香家から継承した知見を生かして茶の湯のような新興文化に取り組むとともに、家伝の由緒ある秘方を調査して社交に役立てていたものと想像される。

本書の「近衛サマ」の特定や、この人物が所持したとされる薫物方二点の検証を現時点で試みるのは困難であるが、資料調査の成果が蓄積した段階で、改めて検討したいと考えている。

7 公方様 「黒方」方 35 の所有者として記載。

本書では平安時代以降の合香家とされる実在した人物の名前があがる。方 35 の他書における同類文は現在までに確認できていない。この為、鎌倉以降の幕府將軍を候補として検討する必要がある。

8 中殿 「黒方」方 36 の所有者として記載。

「中殿」は人物の呼称らしいが管見に不明。「ちゅうでん」と読む中殿は清涼殿の別称として平安朝以降に用いられたが、特定の人物を意味しての用例は既存の辞書類に報告されていない。

「中」の字を呼称に含む合香家には、管見に後十輪院中院通村と中坊治部卿がある。通村は東山御文庫に伝来する薫物書に合香家「後十輪院」としての逸事が記載される（注六五）。また、菊亭文庫所蔵の伝書には通村の秘方秘説について「中院流」、「中流」等と称して他流と区別される（注六六）。中坊治部卿は茶道上田宗箇流の伝書に薫物「梅花」の所有者ないし考案者として名前の見える人物である（注六七）。『多聞院日記』に動静の伝わる中坊治部卿（注六八）とは同一人物の可能性があるが、いずれにしても通村ともども「中殿」との略称で呼ばれた例は確認できていない。

なお、李氏朝鮮では王の後を「中殿」と称した。「薫物之書」の同類文を複数載録する「衆香類集」は、朝鮮から渡来したと見られる「朝鮮芙蓉香」一点を載録。来歴として「水戸より」とある（注六九）。「芙蓉香」という名の香は、仁宗元年（天啓三年、一六二三）以降の承政院で著された国政記録『承政院日記』の同四年以降の記事にも度々記載される（注七〇）。「朝鮮芙蓉香」方の原拠資料がかの地の伝書であったとすれば、同国の王族にゆかりの品と伝わる処方「衆香類集」と来歴の近い「薫物之方」に記載された可能性についても検討すべきかと考える。

勅（方） 「黒方」方42、43、「新枕」方45、「梅花」方50、91、98、「掛香」方73、102の由緒として記載。

「勅方」という表現は『薫集類抄』等の平安時代の

類纂と伝わる諸書には記載されず、室町時代以降の類纂と伝わる諸書には記載がある。本書等に見える「院御所様方」（10「院御所様」解説参照）が上皇ないし法皇の所有、考案した方を意味すると考えられるのに対して、「勅方」は、天皇が在任中に所有ないし考案して記録された処方を意味する語として行われた可能性がある。

本書の勅方は、いずれの場合もどの天皇の処方を意味するのか明記されない。ただし、「黒方」方42については同じ「薫物之書」の方21、29、67に同じ内容であり、それらのうち方29は「ちよくやう光源院」の方と伝わる（23頁）ほか、『薫集類抄』載録の「黒方」方60、61を始めとする複数の処方にも近似する。以上のことから、勅方の「黒方」方29は、古代の著名な合香家にゆかりの由緒ある名方に学びながら、新たな工夫を加えて考案された処方であり、正親町天皇から足利将軍義輝に伝来した可能性が考えられる。

院御所様（方／御方） 「黒方」方58、63、「寝乱髪」方78、「梅花」方92、「竜煎香」方104の所有者ないし考案者として記載。

「院御所様」は室町時代後期以降の上皇、法皇の尊称として用いられる（注七一）。本書に載録される「院御所様」の処方五点のうち四点については人物を特定し得る記述を伴わないが、「黒方」方63については「院御所様より信長御相伝の方」、織田信長に相伝した方と

の由緒が記載される。

『御湯殿日記』によれば、信長は天正元年（一五七二）十一月一日と同九年七月二十八日に正親町天皇より薫物を下賜されている。二度目の下賜は、信長が子息信忠と和議を結んだことへの嘉賞として行われた。織田家では信長の三男信孝も天正八年（一五七九）一月二三日に正親町天皇による薫物等の下賜に与っている。正親町天皇は皇室の親族から公武の臣下にまで度々薫物を贈っており、それらの大半は天皇自らが調合した品とされる。信長は、天正二年（一五七四）三月二十八日に東大寺の秘宝「蘭奢待」を贈られたことから窺えるように、香文化とそれに関する宝物への関心が高かったらしい。各地に伝来する薫物書のうち、江戸時代以降の書写と見られる伝本には、信長ゆかりの処方と思しき薫物方が散見する（注七二）。名香の蒐集のみならず、薫物方と完成品の蒐集、並びに調合にも注力したものと想像される。

信長の青年時代には正親町天皇の父帝後奈良院が存命していた。後奈良院は三条実香・公頼父子に薫物「黒方」方を伝授させたほか、自身でも薫物方を調合、書写した人物である（注七三）が、信長への薫物方下賜を事実として裏付ける史実や関連する伝承については確認できていない。

正親町天皇は信長が本能寺で死去した四年後の天正一四年（一五八六）一月二五日に和仁親王、後の後

陽成天皇に譲位している。方63の所有者ないし考案者とされる「院御所様」が正親町天皇のこととすれば、この処方の由緒については、信長が亡くなり天皇が譲位した後に記されたと解釈するのが穏当であろう。

11 長岡祐斎 「若草」方61の所有者ないし考案者として記載。

不明の人物。他書に同名の合香家による処方等は確認できない。長岡氏を名乗った細川藤孝、後の幽斎に関係があるか。藤孝長子忠興の処方と伝わる「若草」方が他書に記載される（注七四）。

12 信長 「黒方」方63の受領者として記載。10「院御所様」解説参照。

13 小松院 「梅花」方65、66の所有者ないし考案者として記載。

不明の人物。方65は『薫集類抄』に記載される「梅花」の小野宮惟喬親王方44と小一条院敦明親王方53に同じ。方66も『薫集類抄』載録の「梅花」賀陽宮方2を始めとした複数の処方に一致する。「小松院」なる人物は、『薫集類抄』等に伝来する古来の名方を写し伝えたものと推察される。

号のよく似た人物として「小松帝」と追号された平安時代の光孝天皇、及び北朝の後小松天皇が知られる。光孝天皇は合香家として著名な仁明天皇の皇子で、孫の源公忠も宇多、醍醐、朱雀、村上朝の代表的な合香家として位置づけられる。後小松院生母は堀川朝以来

の歴代天皇に薫物方を伝授したと伝わる三条家の姫君。院は伝承に『後小松院宸翰薫物方』を著したとされる。

八条様 「寝乱髪」方79の所有者ないし考案者として記載。

不明の人物。2「八条式部卿宮」とは別人。同じ処方は書中と「衆香類集」に確認できない。

新作薫物の時代の合香家のうち「八条様」と呼び名の似ている人物に、八条宮智仁親王がある。智仁親王は陽光院誠仁親王が新上東門院勸修寺晴子との間に儲けた皇子の一人で、後陽成天皇の弟皇子。後に正親町天皇の養子となった人物である。

「薫物調合秘方」(注一四)を始めとする東山御文庫所蔵の薫物書には、智仁親王自筆の写しと伝わる薫物方が複数点載録されており、智仁親王が後奈良院宸筆の方や新上東門院相伝の方を写し伝えた由が記載される。後世の伝書には、親王の両親である陽光院と新上東門院が所有ないし考案したとされる処方も伝わる(注七五)。また、『言継卿記』や『御湯殿上日記』といった当時の記録によれば、兄皇子の後陽成院は薫物方の執筆や調合、贈答を度々行っている(注七六)。

智仁親王の祖父であり養父でもある正親町天皇について合香家としての動静、伝承の知られることは前に述べた。八条宮智仁親王は歴代の合香家の血筋に生まれており、特に養父と実母からは直接学び伝える機会に恵まれたものと想像される。

本書の八条様が八条宮智仁親王である可能性については、資料研究の成果が蓄積した段階において、処方や説を比較検討することにより再考したいと考えている。

西三条殿 「寝乱髪」方80の所有者ないし考案者として記載。

不明の人物。三条西家の人物らしい。方80の同文は確認できていない。

新作薫物の時代に三条西家で合香に関与したとされる人物のうち、ゆかりと伝わる薫物方が管見に確認されるのは、室町時代中期に活躍した逍遙院実隆と実隆孫三光院実枝、ならびに実枝男公国二男で轉法輪三条実綱養子となった公広である。

実隆は室町時代の香道書『名香合』の著者と伝わる人物で、御家流香道の祖として尊崇されてきた。実隆が所有ないし考案したと伝わる薫物方や調合の説については探索中であるが、『実隆公記』には実隆が薫物方を書写するなどして蒐集、贈与した由が記されている。

『実隆公記』文明九年(一四七七)三月一九日条によれば、実隆は「薫物方」を書写して「後白川院御灌頂日記」と共に「東庵」こと実隆姉聖珍(注七七)へ遣わしたと云う。同一九年(七月二〇日「長享」と改元、一四八七)二月二七日条には、大内政弘の守護する周防国に滞在していた龍翔院三条公敦(7、8頁「若草」解説)から「薫物三具」として「早梅」、「梅花」、「黒

方」の三種類を贈られたことが記載される。「早梅」は早咲きの梅を意味する漢語で、ここでは新作薫物の銘と考えられる。発祥の経緯に関する史実や伝承、処方については探索中である。

文明十一年（一四七九）四月七日、実隆は公敦の右大臣任官を祝して公敦の三条邸で宴を催している。同月一九日に公敦は右大臣に転任されるが、任官をめぐる軋轢を避ける目的から、大内政弘の守護する周防国への下向を決意。『実隆公記』同日条には以上の経緯が詳しく記録されるほか、二日後の二一日条には公敦邸へ赴いて別れの言葉を交わしたこと、長旅の不便を慮って雑色男二人を同行に遣わしたこと等が記されている。

実隆は薫物方を所持しており、自ら書写して家族に贈ることもあった。また、合香家として当時の朝廷や将軍家の薫物の師範を勤めたとされる三条公敦とは、公私に渡り親しく交わっていた。親交の証として、公敦の調合した薫物だけでなく、三条家に伝来した秘方秘説や公敦の考案した新作薫物方の開示を求めたとして不思議ではない。

実隆孫三光院実枝は薫物書に合香に関する逸事の伝わる人物である。菊亭文庫所蔵「萬方」^{（注二四）}には、勅方の新作薫物「千種」方と三条家伝来とされる「仙人」方について、三光院のものと伝わる言説^{（注七八）}が併記される。いずれも新作薫物の発祥に関する内容で、

銘の由来とそれに寄せた芳香の特徴を説き明かしており、薫物の故実に精通して考証を得意とした可能性を窺わせる。なお、この伝承の他にも、実枝が名乗っていた「実澄」と同名の人物による書写と伝わる薫物書が続群書類従に「三条家薫物書」として収録されており、実枝の関与について検証を要す。

実枝孫公広は、叔父実綱の急死により後継の絶えた轉法輪三条家の養子に迎えられ、当主となった人物である。公広については、井伊直弼自筆「茶道下留」^{（注八）}に載録される薫物記録中抜書のうち、慶長年間に公広が徳川家康の懇望により伝授したとされる六種類の薫物の銘と、それらのうちの一種類である「菊花」の芳香の特徴と効能に関する説との写しを確認している^{（注七九）}。伝承の内容が事実であれば、公広は時の将軍家康から薫物の伝授を求められる程評価の高い合香家であった可能性がある。

なお、菊亭文庫所蔵「香具撰様調様」^{（注六六）}には、「三西」こと三条西家の薫物調合の説と見られる伝承が載録されており、それらの中には「三条家」の説と伝わる記述も含まれる^{（注八〇）}。三条西家に「三条家」の説がいつ、どのような経緯でもたらされ、いかにして継承されたのかという問題については、今後の資料研究の中で解明に向けて取り組みたい考えである。

大石 「梅花」方⁹⁶の所有者ないし考案者として記載。不明の人物。本書の類纂された尾張徳川家に関わり

のある合香家か。薫物「梅花」には一般に処方されない薫香具を配合する点で特徴的。処方の内容は、「匂袋」に用いられた「薫衣香」の一種「寝乱髪」に比較的近いことから、「薫衣香」として使用したり「匂袋」に詰めて用いたりするための「梅花」方として考案されたか。

17 尾(方) 「竜煎香」方106の所有者ないし考案者を示す語として記載。

本書の巻末に載録する「梅花」方128の所有者ないし考案者として記載される「尾張」の略か。19「尾張」解説参照。

18 前大相国 「御焼物方」とされる銘不詳の薫物方126の所有者ないし考案者として記載。続く方127も前大相国方か。

方127には銘と由緒について「同」とのみあり、処方の目方は方126のほぼ半分に相当することから、前大相国ゆかりの「御焼物方」の半臍として載録された可能性がある。方126は同じ「薫物之方」の「菊花」方123に、方127は『薫集類抄』等の古い伝書に載録される「黒方」方に薫香具の種類が近い。分量の近い処方書中と他書のいずれにも確認できていない。

前大相国は江戸時代前期以前に太政大臣に任じた人物らしいが、本書に記載された人物の関係者には、合香家として史実や伝承に著名な太政大臣経験者が多数見られることから、現段階での特定は困難である。た

だし、前後に尾張徳川家ゆかりの品と見られる処方の並ぶことから、徳川幕府の歴代將軍のうち太政大臣に任じた初代家康と第二代秀忠のいずれかを意味する可能性は検討を要す。

19

尾張 「梅花」方128の所有者ないし考案者として記載。

「尾(方)」(17) 解説でもふれたように、「竜煎香」方106に併記される「尾方」は「尾張方」を意味して記載された可能性がある。

「竜煎香」方106は新作薫物の一種(12頁)。「梅花」方128には「沈香」ではなく「伽羅(黒沈香)」が処方されており、「貝香」は処方されない。方106と方128の同類文は書中と他書に確認できていない。

尾張徳川家の合香活動については調査中である。蓬左文庫には「薫物之方」や「衆香類集」の他にも薫物書が伝来した(注八二)。それらの中には、我が国で類纂されて写本の現存する薫物書のうち書写年が最も古く、平清盛父忠盛自筆の書が子息頼盛からその子光盛へと継承されたと伝わる「香之書」一卷(注八二)を始めとして、我が国の薫物文化を研究する上で重要かつ不可欠な書物が複数点含まれている。尾張徳川家における薫物文化への関心の高さ、見識の豊かさが推し量られるというものであろう。

「薫物之方」は、後水尾天皇または明正天皇の可能性のある「せんりゆうしのほうわう」にゆかりの品と伝わる薫物「黒

方」方に始まり、平安時代から室町時代までの著名な合香家と思しき人物が所有ないし考案したとされる多数の薫物方と、秘伝の書に記載のあった調製困難な薫香具や特定の処方に付随の調合に関する諸説を掲載し、巻末に至って尾張徳川家伝来の品と思しき薫物方を載録して終えられていた。

徳川将軍家の血筋を皇室に繋いだ法皇の処方を巻頭にいただき、徳川御三家の筆頭として一家を成した尾張徳川家にゆかりの処方により完結するという現状が、類纂当初から変わらぬものであったとすれば、本書の類纂は、尾張徳川家の薫物が同家の血筋に同じく皇室に連なるものであるとの歴史的認識の下に行われた可能性がある。

このことに加えて、巻頭の処方以降に平安時代から江戸時代までの著名な合香家の処方を掲載するところには、尾張徳川家の薫物文化の源流が平安時代の高貴で著名な合香家にまで遡るものであって、それ以降も江戸時代に至るまで様々な名方を学び伝えてきたという、尾張徳川家の薫物の歴史的変遷と正統性をつまびらかにし、保証せんとする意図を汲み取るべきかと考える。

結

徳川林政史研究所所蔵「薫物之方」は、尾張徳川家に伝来していた江戸時代前期以前の薫物の秘方、秘説の類纂であり、同家に伝来した薫物文化の正統性と歴史的変遷を説明、保証する目的で行われた可能性が考えられた。また、共に尾張徳

川家蓬左文庫に伝来した「衆香類集」とは、伝来の過程において依拠資料を共有したか、一方が他方の依拠資料となるような影響関係にあった可能性の高いことが分かった。

本書が類纂された当時の上層社会では、『薫集類抄』を始めとした伝書に記載される古典的な種類の薫物を珍重する一方で、室町時代以降に新たに命銘、考案された薫物の調合や相伝にも熱心に取り組んでいた。従来の研究において、こうした新たな種類の薫物を掲載する資料はほとんど研究の対象とされて来なかった為、その実態や全容は明らかでない。本稿では、これらの種類を「新作薫物」と称し、その銘や処方、伝承上の来歴から窺える特徴について考察した。

新作薫物は、銘だけでなく材料となる薫香具もまた『薫集類抄』載録方とは大きく異なるものであった。そうした変化の生じた背景には、交易上の都合による伝統的な薫香具の欠乏という事情もあったとされるが、新作薫物の時代の合香家らの嗜好を反映した結果とも考えられた。平安時代の合香家らは、誰もが同じような内容の処方を所持する中で、思い思いの工夫を加えることで個性を発揮するとともに、新しみを追求することに熱心であったと見られる。これに対して、新作薫物の時代の合香家らは、奥ゆかしい情趣を帯びた銘による古来の名方という伝統的な枠組みの中で繊細な感覚を競い合うことだけでなく、芳香の趣向の指標となる銘と、その根幹を成す薫香具を変更することにより、新しみをより明瞭に感じられるような芳香を創造することにも関心が高かったものと見られる。

今後の研究では、新作薫物に関する史実や伝承を記した文献の探究、整理に引き続き取り組むことで、新作薫物の発祥と実相、史的変遷の跡付けを目指すとともに、その全容の解明に向けて努力したいと考えている。

注

(一) 公益財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所編「旧蓬左文庫所蔵史料目録(上)」五六頁参照、『徳川林政史研究所研究紀要』三四号、一・六三頁、平成一〇年三月発行。電子版 http://www.tokugawa.or.jp/institute/image_holder02/kyu-u-housa01-mokuroku.pdf 平成二六年三月三十一日最終閲覧。

(二) 薫物の定義と種類については拙著『薫集類抄の研究…附薫物資料集成』(三弥井書店、平成二四年)の解題に報告した考察結果を参照願いたい。

(三) 『薫集類抄』は、平安後期の公卿藤原範兼が長寛三年(永萬元年、一一六五)以前に勅により類纂して奉ったと伝わる薫物書。伝存する薫物書のうち書写年の最古のものは伝平忠盛類纂「香之書」(諸本は名古屋市蓬左文庫、陽明文庫に伝来)で長寛二年(一一六四)。書籍としての規模は『薫集類抄』のほうが大きく、内容も網羅的である。以上の諸書の書誌と内容は拙著『薫集類抄の研究…附・薫物資料集成』(三弥井書店、平成二四年)に掲載。

(四) 『薫物故書』は、四条朝の三条家当主白河入道右府実親が蒐集した薫物の処方や説を源泉とし、後裔の後白川入道右府公冬のに上下二冊として書写されたと伝わる薫物書。内容は、『薫集類抄』に載録された薫物の種類や調合の手順の同類文が大半を占める他に、古来の著名な処方を分割した半臍以下の処方や、古い時代の調合の手順に類纂当時の実情や新たな工夫を加味して再構築した内容による調合法なども載録される。書誌と内容は拙著『薫集類抄の研究…附薫物資料集成』(注二)を参照されたい。

(五) 『薫集類抄』などに載録の無かった銘の薫物について「新調合之秘法」や「新作」と称して記載することは、轉法輪三条家で類纂されたと伝わる薫物書を中心とした伝書に見られる。宮内庁書陵部所蔵御所本「薫物黒方秘方」(書誌と内容は拙稿「宮内庁書陵部所蔵「薫物黒方秘方」翻刻」参照。『広島女学院大学日本文学』第一九号掲載、平成二一年七月発行)である。文龜三年(一一五〇三)九月中旬に右大将こと三条実香が記したとされる識語が伝わり、「若草」「玉椿」の二種類の薫物をして後白川入道右府公冬が新たに考案したとある。「新作」の語の用例のうち古いものは、陽明文庫所蔵「黒方巻物」(請求記号: 95094、95095)写本二巻のうち、永正五年(一五〇八)内大臣轉法輪三条実香筆本の写しで柳原中納言淳光が相伝したとされる一卷(95094)に確認でき、実香の父龍翔院三条公敦が考案した「千種(ちぐさ)」という薫物について、「新作名号千種」と記述される。公敦は永正四年四月八日に周防の地で薨去した。「新調合之秘法」、「新作」のいずれの表現も、轉法輪三条実香の発案による可能性が考えられる。

(六) 「薫物之方」と「衆香類集」の内容を比較すると、「薫物之方」を含む薫物書の多くに載録されず、「衆香類集」のみに伝わる特殊な伝承の存することが分かる。

「衆香類集」薫物の処方や調合法の他に、牡丹の花の育成法や朱肉の処方、調合法も載録する。管見では、牡丹の育成法を写した資料は専修大学図書館菊亭文庫所蔵の薫物資料群にも付随して伝わる。薫物の調合過程には、草花の根元やその植えられていた土の中に埋めるという手順のあることから、そうしたこととの関連による可能性を検討すべきかと考える。朱肉の処方と調合法については、徳川幕府の開祖家康自筆文書のうち、薫物の処方を記した「香合等覚書」一帖にも朱肉の処方を載録した例が報告される(『新修 徳川家康文書の研究』五二五頁「香合等覚書」解説ならびに五六九頁「朱印練合覚書(年月日未詳)」解説参照)。「香合等覚書」では朱肉の方に続けて新作薫物「きやらあふら(伽羅油)」の方が載録される。朱肉も「伽羅油」も油脂を処方することから、油脂を

その他の具材と練り合わせる段階において、同様の手法を要した可能性はある。こうした共通点は、処方の掲出順を考える段において考慮されたかと考える。

「伽羅油」の方は同書にいくつも載録されており、中には「唐方」と伝わる処方もある。「伽羅油」という銘は我が国で考案されたかと考えるが、処方そのものは大陸で発祥し、本朝に渡った後に新たに命銘された可能性はある。「伽羅油」の方を始めとして、「衆香類集」には中国、朝鮮から伝来した種類と見られる薫物の銘と処方が複数載録されるが、「薫物之方」には「伽羅之油」以外にこうした渡来の種類とされるものは確認されない。ただし、同書には漢字表記が不明で国内の他書にも載録されない薫物の銘が散見し、これらが内外いずれの発祥であるか不明である。「衆香類集」への渡来の薫物方の伝来を顕著と見なすべきかどうかは、今後の検討課題として引き続き究明に取り組む考えである。

(七) 「香合覚書」一帖、慶長一八・二〇年（一六一三・一五）写、徳川家康筆、徳川美術館所蔵

(八) 「茶道下留」彦根藩井伊家文書、彦根城博物館、請求記号・28075 典籍 91。翻刻は、熊倉功夫編『史料 井伊直弼の茶の湯』（彦根市教育委員会、平成一四年）下・二五五頁、および拙稿「井伊直弼と三條家薫物秘説との関係について」（研究ノート、『藝能史研究』一八二号、藝能史研究会、平成二〇年七月）二九頁に掲載。

(九) 上田流和風堂（広島市）に収蔵する二点（各一冊）の無題の薫物書。整理番号・246、²⁴⁷

(一〇) 『五月雨日記』の薫物の銘の由来とされる和歌については書中の伝承に明記される。命銘と趣向の優劣の判定基準については大河内定夫著「茶の湯道具と香（香木・薫物）」にみられる歌銘の実態と分類について―和物茶入の歌銘を主として―（『金鯉叢書』第一三輯、財団法人徳川黎明会、昭和六一年六月）における分析結果に詳しい。

(一一) この説は江戸時代以降の伝書を中心によく確認されるもので、例えば東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」には次のように記載される。

梅花新枕富士ナト殊ニ秘方也。梅花ニハ梅干ノ実ヲワリテ中ノ仁ヲトリ出シ水ニ漬テ数日ヲ経テトリアケ舐テ見テシワハキ氣ノナキ時トリ出シ陰乾ニベキサミ粉ニベ半朱入ル也。事外ノ口伝也可秘々々。

（拙稿「東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」解説と釈文―杏雨書屋所蔵『香秘書』享受史一考―」、武田科学振興財団杏雨書屋編「杏雨」第一四号、平成二三年六月発行、説12、三六四頁）

(一二) テキストは『新編国歌大観』による。第一巻所収『拾遺和歌集』一一八番歌。『新編国歌大観 DVD-ROM 版』（角川学芸出版、平成二四年）参照。

(一三) 宮内庁書陵部所蔵御所本「薫物黒方秘方」。文明七年（一四七五）龍翔院三条公敦が類纂して後土御門天皇に伝授したとされ、それ以降も天文一五年（一五四六）まで伝写を重ねた由が書写者識語に伝わる。詳しくは拙稿「宮内庁書陵部所蔵「薫物黒方秘方」翻刻」（『広島女学院大学日本文学』第一九号、平成二一年七月発行）参照。

(一四) 東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」載録の説11参照。拙稿「東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」解説と釈文―杏雨書屋所蔵『香秘書』享受史一考―」、「杏雨」第一四号、平成二三年六月発行、三六四頁。

(一五) テキストは新編日本古典文学全集『源氏物語』一卷による。僧坊の様子は次のように物語られる。

げに、いと心ことによしありて同じ木草をも植ゑなしたまへり。月もなきころなれば、遣水に篝火ともし、灯籠などにもまゐりたり。南面いときよげにしつらひたまへり。そらだきもの心にくくかをり出で、名香の香など匂ひ満ちたるに、君の御追風いとことなれば、内の人々も心づかひすべかめり。（二二頁）

(一六) 『源氏物語』葵巻で香壺の箱の持ち込まれる場面の本文と、光源氏の心内語に見られる引歌に関する注釈書の説は次の通り。

の給しもちゐ、忍びていたう夜ふかして、もてまいれり。少納言はおとなしくて、はづかしくやおぼさむ、と思や

り深く心しらひて、むすめの弁といふを呼び出でて、「これ忍びてまいらせ給へ」とて、香壺の箱を一つさし入れたり。「たしかに御枕上にまいらすべき祝の物に侍。あなかしこ、あだにな」と言へば、あやしと思へど、「あだなる事はまだならぬ物を」とて取れば、「まことに、いまはさる文字忌ませ給へよ。よもまじり侍らじ」と言ふ。若き人にて、けしきもえ深く思ひよらねば、もてまいりて、御枕上の御き丁よりさし入れたるを、君ぞ、例の聞こえ知らせ給らむかし。(中略)かくて後は、内にも院にも、あからさまにまいり給へる程だに、しづ心なくおもかげに恋しければ、あやしの心や、とわれながらおぼさる。通ひ給し所々よりは、うらめしげにおどろかしきこえ給などすれば、いとをしとおぼすもあれど、新手枕の心ぐるしくて夜をや隔てむとおぼしわづらはるれば、いと物うくて、なやましげにのみもてなし給て、「世中のいとうくおぼゆるほど過ぐしてなむ、人にも見えたてまつるべき」とのみいらへ給つつ過ぐし給。

(以下の注欄における傍線は稿者記入。新日本古典文学大系『源氏物語』一卷、葵巻、三三一・三三三頁)

新婚の相手(紫上)がいじらしくて、一夜も隔たつていられようかと、自然と気づかわれるので。「若草の新手枕をまきそめて夜をや隔てむ憎くあらなくに」(万葉集一・二五四七)。

(傍線部への脚注。同上、脚注一八、三三二、三三三頁)

(一七) 後西院宸翰と伝わる「薰方之書」(二点・各一枚、包紙あり、宮内庁書陵部所蔵、宸₁₄₂₀)には「梅花」、「新枕」、「富士」の处方は載録されない。

後西院から常子内親王への薰物方の伝授については、『基熙公記』と『无上法院殿御日記』の天和三年(一六八三)二月二十四日、二九日条に詳しく記載される。東京大学史料編纂所所蔵『无上法院殿御日記』(謄写本)同年二月二十四日から二九日までの条には次のようにある。

廿四日

丁酉

はれ曇夜二入雪ふりつもる二寸程も有

「(21丁表)

新院へまいる内々たき物てうかう有へきよしにてけふ御手つたへにまいる勅さくの御方我身へ御さうてんあそはし下さるへきとの事にて三色あそはしつけ御おくかきなと有をつたへ給はる誠にかやうの事は大事の御はうにてゆいじゆ一人へ御てんしゆ有事なるを道のめうかになひかたしけなき事中くおろかにはいふにたらすすなはち此三色のうち梅花をまつくけふ御前にててうかうす何もくこまやかにくはしくをしへ給はりかたしけなき事也残二色ハ又四五日中ニまいりててうかうすへきよし仰也御方ともけふはいりやうす左府もまいり給ふ亥刻程に御いとま申すめてたしく

「(21丁裏)

廿五日

戊戌
はれ曇時々雪降敷

きん中御当座の御くはいにて左府も参内也夜に入退出

廿六日 己亥
はれ曇夜に入雨ふる

中宮へまいる出御なしまいらせ候御せんまい
らせらるゝ女一の宮大聖寺殿も御まいり也すい
れう寺殿もまいり給ふ御にきくゝの事にてめて

「(22丁表)

たさなり亥刻程にかへる江戸よりたより有今
度立坊立後の御よろこひに甲府なとよりも御
しう義あけらるゝつかひのものは安部いほり
といふもののほる其ひんき也ふみともあり一
たんと無事のよし申来りよろこふ大樹よりも
御しう義上られ其後に上げゆへとうりうして
待と也大樹よりは松平さぬきの守のほせらる
々と也

廿七日 庚子
曇時々雨少々ふる

新院御くはいにて左府も今朝よりまいり給ひ
タかた御かへり也けい寿院まいられタかたさ
うはんす日くれかたに園大納言女はう年頭

「(22丁裏)

のれいにまいられ難波少将の女はうも同道也
いづれもさかつきつかはす戌刻程にみなくゝか
へらるゝ

廿八日 辛巳

御ふくろ御出也おほい少将もしよろう以後け
ふはしめてまいられめてたさくゝみなくゝタかた
く御さうはんす御過て座なとへも同道す御
ふくろくれかたに御かへりなり少将は子刻は
かりにかへらるゝ 新院より御座の梅花たふ

「(23丁表)

廿九日 壬寅
はるゝ

新院へまいる御たき物御てうかうの御手つた
へす我身もひとひの残の二色をてうかうす
ふじ 新枕 此二色也 いづれも御ひはうとも
のこらす御さうてんあそはし給はりかたしけ
なさいふにたらす今度立坊立後の御よろこひ
に将くんけより松平さぬきの守のほせられけ

る参内院参春宮中宮へもまいる御物みよりけ

ん物す戌刻程ニ御いとま申てかへる山田けん 「(23丁裏)

きやうまいりこよひしゆくす

『无上法院殿御日記』一九、東京大学史料編纂所蔵、謄写本、天和三年(一六八三)、請求記号:2073-179-36-19)

(一八) 管見では、この伝承は次の薫物書に確認される。

一、「薫物方」、一冊、写本、京都大学図書館菊亭文庫所蔵、マイクロフィルム整理番号P1130。記述の書写者

識語に「天正一七年二月一五日これをかく」と。

二、「薫物御覚書」、一冊、写本、東山御文庫、函号

113-4-2-13。

(一九) 「薫物(ノコト)」、一冊、写本、宮内庁書陵部高松宮本、請求記号:38。

(二〇) 「後水尾天皇薫物調合御覚書」、一冊、写本、東山御文庫所蔵、函号113-4-2-20

(二一) テキストは続群書類従巻第三五九所収『五月雨日記』(群書類従・第一九輯、続群書類従完成会、昭和六二年訂正三版第六冊)による。

(二二) 「後水尾天皇薫物調合御覚書」(注二〇)に次のように記載される。

玉椿の方の事これは入道相国家にはし

めて名を付たる方にてありけるに

先皇はつゐに御調合候はす候つる

ほとを香具の次第ぬりかさね候

事などは候すと方もしるし候て候は

口伝候へは 「(4丁表)

見え候はす(中略)仙人

有明なとはちかき方にては候へとも

先皇も度々御調合の事にて候へは

玉椿は名を秘したる方にて候へは春
の比人にをくり候とていつくにも
はやり候可と推量候(中略)

以後奈良院勅筆写之 「(4丁裏)

後柏原天皇宸筆の「秘方巻物」の焼失について、東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」は次のように伝える。

侍従 秘方巻物内也 此巻物宸筆
後柏原院

沈四両 丁二両 焼失可

貝一両 甘一分二朱 惜々々

「(1丁裏)

(テキストは拙稿「東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」解説と釈文―杏雨書屋所蔵『香秘書』享受史一考―」(注一四)による。三六〇頁)

(二三)「薫物黒方秘方」(注一三)。文明七年(一四七五)龍翔院三条公敦が類纂して後土御門天皇に伝授したとされ、それ以降も天文一五年(一五四六)まで伝写を重ねた由が書写者識語に伝わる。

(二四) 管見では、新作薫物「長月」「有明」の発祥にまつわる伝承や処方は、次の諸書に記載される。

一、「寛文十一年俊海処方」、一冊、写本、鳩居堂所蔵。記述の書写者識語に三条入道相国実香公自筆を天正四年一〇月下旬に書写したものと記載。

二、「薫物方」(注一八) 記述の書写者識語に「天正十七年二月十五日これをかく」と。

三、「薫物御覚書」(注一八)

四、「萬方」、一冊、写本、専修大学図書館菊亭文庫所蔵、第二函第118号。薫物「有明」のみの由緒の概要と処方が伝わる。

五、「三条家薫物書」、一冊、刊本、続群書類従、巻第五百五十一。由緒の概要と処方を載録。

(二五) テキストは『新編国歌大観』による。第一巻所収『古今和歌集』六九一番歌。『新編国歌大観 DVD-ROM版』(角

川学芸出版、平成二四年）参照。

(二六) 「萬方」(注二四) 参照。

(二七) テキストは『新編国歌大観』による。第一巻所収『古今和歌集』四一番歌。『新編国歌大観 DVD-ROM 版』(角川学芸出版、平成二四年) 参照。

(二八) 新編国歌大観並びに国際日本文化研究センターホームページ「和歌データベース」参照。類型表現「寝くたれ髪」の用例と変遷については、山口正代「夕霧の『寝くたれ』の顔」『古代中世国文学』第二二号、広島大学、平成一八年六月発行、一一・一九頁に詳しい。「寝乱髪」の類型・類義表現としては、「寝腐(くた)れ髪」が歌語として古来用いられており、これらも柿本人麻呂詠と伝わる「吾妹子のねくたれがみを猿沢の池の玉藻と見るぞかなしき」(『大和物語』第一五〇段等) 以下の用例が知られるほか、名詞「寝腐れ」と「髪」を詠み込んだ一首「忘れずも思ほゆるかな朝な朝な寝し黒髪のねくたれのたわ」(『源順集』三七番歌) 等もある。

(二九) 伊藤正義『金春禅竹の研究』(赤尾昭文堂、昭和四五年) 参照。

(三〇) 廿四世観世左近訂正「白楽天・実盛・楊貴妃・玉葛・融」、観世流昭和版の内第四冊、檜書店、昭和六年、九丁表

(三一) テキストは『新編国歌大観』による。第一巻所収『風雅和歌集』九一二番歌。『新編国歌大観 DVD-ROM 版』(角川学芸出版、平成二四年) 参照。

(三二) テキストは『新編国歌大観』による。第八巻所収『草根集』四八三二番歌。『新編国歌大観 DVD-ROM 版』(角川学芸出版、平成二四年) 参照。

(三三) テキストは『新編国歌大観』による。第一巻所収『続千載和歌集』七八番歌。『新編国歌大観 DVD-ROM 版』(角川学芸出版、平成二四年) 参照。

(三四) テキストは宮本三郎『校注 ひやう・猿蓑』(笠間書院、昭和五〇年) による。六八頁。

(三五) テキストは『新編国歌大観』による。第一巻所収『古今和歌集』七五七番歌。題しらず、よみ人しらず。『新編

国歌大観 DVD-ROM 版』(角川学芸出版、平成二四年) 参照。

(三六) 宋陳敬撰『陳氏香譜』(欽定四庫全書、子部、第八四四卷) 巻第一、二五二頁参照。

(三七) 同右『陳氏香譜』巻第二には二四点の「龍涎香」方を載録(二八一・二八四頁)。主要な薫香具には「沈香」、「浅香」、「檀香(紫檀、白檀)」、「甲香」、「甘松」、「麝香」、「龍腦」といった本朝の薫物にも汎用される品々を数えるほかに、「金顔香(安息香の異名)」を筆頭に記載した処方も複数見られる。

(三八) 「無題・薫物書」、一冊、上田流和風堂所蔵、請求記号・246、一一丁裏・一二丁表

(三九) 「新古御薫物秘伝書」は一冊、成田山仏教図書館所蔵、請求記号・145-604。「薫袋伽羅薫物御目錄」は一冊、仮綴、東山御文庫所蔵、函号・172-2-19。

(四〇) 天理図書館所蔵吉田文庫白井本、請求記号・吉95-63

(四一) 南方熊楠「十二支考」のうち「馬に関する民俗と傳説」(「太陽」二五ノ一、大正八年(一九一九)一月初出)の「民族」の章では、我が国の調香文化史に言及する中で、鯨糞が『薫集類抄』以降の時代に処方され始めたことが指摘される。

(四二) テキストは『新編国歌大観』による。第一巻所収『古今和歌集』一七番歌。題しらず、よみ人しらず。『新編国歌大観 DVD-ROM 版』(角川学芸出版、平成二四年) 参照。

(四三) 「薫袋伽羅薫物御目錄」(注三九)

(四四) 『基熙公記』元禄一五年(一七〇二)六月一日、三日条、東京大学史料編纂所謄写本、請求記号・2073-175-84-54、七〇丁裏・七二丁裏

(四五) テキストは『新編国歌大観』による。第一巻所収『後撰和歌集』一〇八番歌。詞書「前栽に山吹ある所にて」。『新編国歌大観 DVD-ROM 版』(角川学芸出版、平成二四年) 参照。

(四六) 井原西鶴の短編遺稿集『西鶴織留』巻一の四「所は近江蚊屋女才覚」には句玉を室内の飾りに用いる様子が次

のように語られる。

糊の二布、糊こはごはとして、やうやう我身を隠すもあるに、此蚊帳を見れば、四角に赤地の唐織を菊の花形に切あはせ、紅みの大房に匂ひ玉をむすびさげ、るり、さんごじゆの飾り、銀の鍵・金の輪、小縁ひとまひとまに鈴の音なし、乳毎に玉色の房を付、裙におし鳥のたはふれをさまさまに縫せ、岸の柳に雪をもたせ、冬川の気色、見てさへ涼しきに、あの中に寝ば夏をわするべしと浦山敷、爰は内裏のちかくなれば、いかなる高家の御物語、皆人極楽と聞およびし仏様の寝所も、何としてこんな事あるべし。

『新編西鶴全集』第四卷・本文篇、新編西鶴全集編集委員会、勉誠社、平成一六年、三三〇・三三一頁

(四七) 『日本国語大辞典』第二版、一〇巻、小学館、平成一三年、三七九頁

(四八) 宮川葉子「柳沢文庫蔵靈元院下賜『十二月和歌』、『国際経営・文化研究』Vol. 11、No. 1、平成一八年一月、一七七頁

(四九) 『古語大辞典』、中田祝夫編監修、小学館、一四一二頁

(五〇) 拙著『薫集類抄の研究』附・薫物資料集成(注二)一六八・一七二頁

(五一) 静嘉堂文庫所蔵「香譜」(一冊、請求記号：14327-1-80-56)は江戸時代初期以降の書写と見られる伝書で、轉法輪三条家の秘伝を中心とした類纂。そのうち薫物「兵部卿」方は次の調合の説を伴って載録される。

右家の油にて解く上所はきやらの油と花の水にて解くといへとも五體に塗たる時ははりと解けぬなり只ふた(豚)の油を以て解たるよし白粉を加へたるよきなり

(三五丁裏)

また、成田山仏教図書館所蔵「新古御薫物秘伝書」(注三九)載録の「兵部卿」方には「顔に塗ル也」との注記がある。

(五二) 「現在七面」、観世流謡曲本、四一、檜大瓜堂、大正六年、三丁表

(五三) 「掛香」は「匂袋」の同義語、「焼物」は「薫物」の同音異字語である。本来の銘を伏せたか伝わらないままに処方載録した場合、「掛香」や「焼物」の語を銘として仮に用いたものかと考える。「掛香」は新作の薫物の一つとして数えた。

(五四) 拙著『薫集類抄の研究』附・薫物資料集成(注二)一一八、一一九頁参照。

(五五) 関係記事の一部は『天皇皇族実録』に掲載されるほか、瀬川淑子著『皇女品宮の日常生活』、『无上法院殿御日記』を読む(岩波書店、平成一三年)第二章「品宮の生活意識」にも後水尾院政期の出来事を中心に詳しく紹介される。

(五六) 後水尾院の薫物方や調合法と伝わる記述は、高松宮本「薫物(ノコト)」(注一九)、東山御文庫所蔵「後水尾天皇薫物調合御覚書」(注二〇)、専修大学図書館菊亭文庫所蔵「萬方」(注二四)等に記載される。

(五七) 拙著『薫集類抄の研究』附・薫物資料集成(注二)解題三四・三六頁ならびに人名家名等解説三〇二、三〇三頁参照。

(五八) 『言継卿記』と『御湯殿上日記』によれば、正親町天皇の父帝後奈良院は、天文二年(一五三三)一〇月(または十一月)一九日に三条実香・公頼父子を御所に召して薫物「黒方」方の伝授と調合をさせたことがある。『言継卿記』と『御湯殿上日記』の後奈良朝の記録には、公武の臣下に餞別品等として自ら所持する薫物を下賜したことや、皇子の方仁親王(のちの正親町天皇)のためにしばしば薫物を調合して贈った由が記されている。

(五九) 『基熙公記』寛文五年(一六六五)十一月七日条に次のようにある。

七日 丑 己 天朝晴午後薄陰入夜雨

昨日好君新殿移徙之間為暇請宮ハ参同道好

君へ後向勸●候後帰了

御所方へ明日出仕之間為祝壹一折充進上


水野石見守明後日関東下向之間為錢茶道具

一箱應山長山等御調合之薰物等遣之其薰物

梅花新枕黒方三種此内黒方應山御調合也其

薰物内まさりの具三ツニ入其具内外金薄にて

たむ也三ながら入一薄様了此外青一被遣之

者也其殘如  此貝のつま也紺（ミセケチ「口を紺の」）の口を（ミセケチ）し紙（12丁表）

にてうつくしくはる也銘の書様如此殘二つ

同事也内まさりは外銀内金ニスルなりされ

とも内外金にしてもくるしからぬよし法皇御

説也薄様一つに三つか五つか七つか入者也

（以下の注に●とした箇所は翻字中。東京大学史料編纂所所蔵『基熙公記』第一冊、謄写本、請求記号：2073-175-1）
（六〇）『基熙公記』元禄一五年（一七〇二）六月一日、三日条に次のようにある。

六月大

一日辛亥 天従昨日雨不休未刻漸止了

從一昨日沌沌今日漸時快氣仍不出雖右府○参令

内了晚景左中将隆實朝臣為御使来所出逢

仰云兼々所被仰薰衣香調合之事可被聞食

間一兩日中可参旨也跪承了明後三日已

刻可参旨申入了凡薰衣香之事雖非傳授亦有

口傳等從 後西院委被仰聞之大概余外無其

仁歟今度可申入子細条々仰下為公用所習置

尤叶所存喜悅々々

（一日条後文「公方殿より」云々は省略）

二日壬子 天朝晴午後猶半後雨下

無為指要事人来而已

三日癸丑 天陰時々見日影朝間雨時々下晚猶

不休

已刻武家傳奏兩人来皆言談此席先日不来之

賀茂●申状寫留間返遣云々已半刻参 内今

日薰衣香御調合始也先日蒙仰之間書薰衣香

方五種 山吹 八重一重 潤紅 ねみたれかみ
臺 以上書折紙一々別紙也

隨身之又持参香具等被召七十二條間先申權

「（72丁表）

「（70丁裏）

目之事即一々御調香大典侍局新大典侍局両

人時々在御前凡薰衣香事雖無為指披傳所^{マヤ}

非無口實仍披藏の事等一々令言上尤有御

感 後西院ヨリ被傳下之趣不殘一事申入了

當時調合之事無知古實者余不慮傳來叶時宜

是聊数奇之所為也自愛々々西刻退出了

(四日条 略)

「(72丁裏)

(『基熙公記』元禄一五年(一七〇二)六月一日、三日条東京大学史料編纂所藏、謄写本、請求記号:2073-175-84-54)

(六一) 『天皇皇族実録』靈元天皇実録(ゆまに書房、平成一七年)の「秦(松室)仲子」条によれば、仲子の呼称は『仙洞女房日記』に「玉がき」または「少納言」と、『椒庭譜料』に「玉垣」と記載される。

(六二) 『无上法院殿御日記』における薰物関係記事のうち主要なものについては、東京大学史料編纂所の謄写本を底本として『天皇皇族実録』後水尾天皇実録から靈元天皇実録(ゆまに書房、平成一七年)までの各巻に載録されるほか、『瀬川淑子著』皇女品宮の日常生活:『无上法院殿御日記を読む』(岩波書店、平成二二年)に報告される。

(六三) 『名護親方程順則資料集・1―人物・伝記編1』

所収「名護親方程順則年譜」(名護市史編さん室編、名護市教育委員会発行、平成八年)に掲載された程氏家譜の要文によれば、程順則は康熙五四年(正徳五年、一七一五)六月に近衛家熙に次のものを献上したと云う。

一、康熙皇帝御詩宸筆石摺一枚

一、詩韻釈要一部

一、孔林楷杯一

右の返礼として、後日家熙が「薰物一香合」を順則に送り届けたことが、薩摩藩家老種子島禪正久基の書付(『琉球小宗蔡姓家譜』康熙五九年条、東京大学史料編纂所ホームページ・大日本史料データベース参照)に次のように記されている。

(享保五年)

康熙五十九年庚子冬荷蒙扶桑京都 前任摂政大臣正一

位藤原家熙公深嘉^温所献木假山記寄賜五十硯匣一分時有

薩州御家老種子島禪正殿御書付曰

一、硯箱老通 蔡文若

一、薰物^壺香合 程順則

右前摂政様江先年程順則ハ差上候楷杯御物数寄ニ而木假山ニ被成候記調差上候處蔡文若文章結構ニ成程順則別記相添差上丁寧懇切之儀不殘御喜慮之御事ニ候文章兩篇物外楼之珍玩不過之思召候依之御側^江有合候品々右之通此度拝領被仰付候間難有頂戴可仕候以上

九月三日 禪正

以上の贈答については、近衛家の侍医山科道安が家熙の言説を聞き書きした書とされる『槐記』享保九年正月条にも次のように伝わる。

或時、宗白ト一所ニ、参候ノコトアリケル、御談話ニ、琉球ノ程順則ハ、年来故アリテ、折々書翰ヲ奉ル、去年輪番ニテ、本唐ニ行、今年帰リテ、土産ニ、孔子ノ廟へ参リ、孔廟ノ傍ニ、昔シ子貢ノ樹ラレタリト云、楷木ノカブアリテ、ソノ木ハ枯朽テ、又砌ニ若木ノ楷木ノ、後世ニウエタルアリ、ソノ昔ノ楷木ノ杭、一塊ヲ取帰リテ、内ノ方ヲ漆ニテヌリ、楷盃ト号シテ、文一卷ヲ捧ク、ソノ形古木ニシテ、今様アル可キ物ニアラズ、然レトモ、公曾テ酒ヲ嗜玉ハス、イト惜キコトナリ、覆シテ見レバ、木理縦横、高下凸凹、ソノ形假山トシテ見ハヤトオボシメシテ、其旨ヲ仰ツカハサル、程氏モ辱コトニ思ヒケン、又假山記一卷ヲ書テ奉ル、今日御見セナサルヘキノ由ニテ、則チ物外楼上ニ、青貝ノ一間ハカリアルヘキ御几ノ上ニ、洲崎ノヤウニ、砂ヲ蒔テカサラレ、其傍ニ二卷ノ記ヲ置カル、宗白ト一同ニ拝見ス、

（史料大観『槐記』、黒川真頼・小杉楹邨・井上頼圀校閱、哲学書院、明治三十三年）

（六四）『槐記』における薫物関係の記述には、例えば次のようなものがある。

○（享保一三年）十二月十一日、安平次主殿、御茶ヲ指上グ、（中略）

○其夜ノ御話ニ、今ノ世ニ総ジテタキモノノ香ヲ、嗅コ

トハナキコト也、タキモノハ種々ノ合セモノニテ、常ニ嗅テ香ノ好悪ノコト、シルゝモノニアラズ、焼カザレバ知レヌモノ也、風爐ノ茶ニ伽羅ヲ入テ出シタルハ、嗅クコト也ト常修院殿ノ仰ラル、其方モコチノ流ナレバ、兼テ左ヤウニガテンスベシト仰ラル、

○（享保一八年一月）十七日夜、参候、入江様御成、仰ニ、先日大膳カ茶ニ、勅方焼物ヲ爐ヘクベタルコト、甚ダセザルコト也、勅製トモアランモノヲ、爐中エ焼コトハ慮外ノコト也、アルマジキコト也、棚ニ香爐ニテモ置テ焼カバ、シカルベカランカ、爐中ヘハ決シテ焼マシキコト也、又先日西王寺カ花所望セシ、花臺ノ置處モイカゝ、宗佐カ筒ヲカケテ、御前ヘ花ヲ願コトハアルマジキコト也、古宗和ナドナラハ、一條コトハリヲ云テ生クマジキコト也、宗佐ノ切形ハイカヤウニ生ケテ、然ルベシトモイザシラズ、先亭主ニ、生テミセラレヨト云テモ餘儀ナカルベシ、唐物ノ籠トカ、一向ニ宗和ノ筒トカナラハ、格別ナリト仰セラル、

（以上、史料大観『槐記』、黒川真頼・小杉楹邨・井上頼圀校閱、哲学書院、明治三十三年）

（六五）例えば東山御文庫所蔵「後水尾天皇薫物調合御覚書」（注二〇）には、依拠資料を「後十輪院聞書」とする次の伝承が記載される（傍線は稿者記入）。

方ニ貝三朱或二麿二朱 或三朱又
或二朱半

口伝云貝ハコシラヘテ久シク成タルハ三朱

尤宜●●コシラヘタルハ句甚シキ故

二朱宜由正親町院仰云々

後十輪院聞書

麿モ旧ク句ヒナキハ三朱モ二朱半モ吉

薫物合せ覚さる間は貝をは少シヒカヘ

タルカ宜由被仰云々 同聞書

薫六 同前

同聞書

「(5丁裏)

(六六) 専修大学図書館菊亭文庫所蔵「香具撰様調様」(一冊、請求記号…第2函第119号)表紙の見返しには、載録した諸説の由緒を区別する記号とその内容について、次のように記される。

花ノ点	朱ノ丸	花ノ丸
(((
清	中	三西
	当家所持	朱ニテカキタルハ三条ノ説
朱ノ点		

記号「花ノ点」を付された本文は「清」と略される家が所持した秘伝で、「朱ノ点」は「中」家、「朱ノ丸」は「三西」家、「花ノ丸」は「当家所持」の説を意味しており、「朱ニテカキタル」本文は「三条ノ説」であると云うのであろう。

原本において、「花」に該当しそうな点や丸は、青筆によるそれらと見られる。朱筆の点は多数確認でき、そのうち一つに「中院説」とあることから、「中」は中院家を意味した可能性がある。「中院説」には他に青筆により全文の記述された説もある。

なお、「香具撰様調様」には、右の家々のうち中院家と三条家および「勅(作)」こと天皇については「流」を成したとの認識の下に著されたとされる記述も確認できる。薫物の流派の存在を示唆する可能性をうかがわせることから、今後の調査の中で詳細について明らかにしたいと考えている。

一ウヅム事 春ハ五日 夏ハ三日 秋ハ七日 冬ハ十日

雨ナトフラハアシカリナン梅菊ソノ花ノシタノツチヲ物ニ

入テタキ物ヲツホニ入テカキウツミタルハヨシ 一説春夏ハ

三日秋冬ハ五日ヨシ雨露ノカヽラヌトコロノツチヲホリ

テツホニ入口ヲヨクヽツヽミテウツムナリ

茶碗ニ薫物ノ分料ヲヨクミテヨキホド蜜ヲ入テ先

塩ヲ入也シホハクイカゲンナレドモソレヨリハカラキガヨキ也

(29丁表)

シホヲ入テキネニテヨクヽスリテ後ニ墨ヲ入テ又

ヨクヽスル也墨スグレバ薫物カハク也ソウジテ蜜ハ

少シルキホドニ入テヨシ白蜜ハナヲヽカワキタガル也サテ

ソノ中ヘ粉合ノ薫物ヲ入大方ユキワタルホドニソトツ

キ合テ石ウスニ入三両二両アハセナラハ二三千ホドツ

クヘシ二百キネツヽホドニテヘラニテウチカヘシヽツ

クヘキ也勅作中院等ノ流ニカナウスニテシホ墨

ヲ粉合入テノチ入テソノヽチ蜜ヲ入ソノカナウスニ

テソノマヽツケドモ三条ノ流ニハ右トナリ也ツキヤウハ

スリヅキニシテヨシコレモ勅中ノ流タヽカロクコマカニツ

ク也 (29丁裏)

(六七) 上田流和風堂所蔵〔無題・薫物書〕(請求記号…246)の薫物「梅花」方49は「中坊治部卿相伝」と、同方50は「同治部卿」方と伝わる。

(六八) 例えば『多聞院日記』の夢幻記に次のように名前が見える。

一天正五丁丑卯月下旬夏中屋参籠之時、夢ニ中坊治部卿

云、誰人ノ舞トモナク語テ云、
衣袖衣ヲウツス衣哉

ニホワヌ力ノ道ノ便リニ

如此語ルヽヲ正ク夢ニ見覺了、不思議事也、真実ノ出家ナケレハアラマホシキトノ心ト聞ヘタリ、悲キ事哉、

『多聞院日記』五、竹内理三編、増補続史料大成、第四二卷、臨川書店、昭和五三年

(六九) 徳川林政史研究所所蔵旧蓬左文庫本「衆香類集」(請求記号：旧蓬左36-5)の載録方と付随の説等は次の通り。

朝鮮芙蓉香

方73 沈束香 白檀 各二両
十匁二両也 「(38丁裏)

甘松 零陵香

茅香 各一両

丁子 サンナ 三乃子

八角 ウイキヤウ 各七錢 小脳 五錢
樟腦ノ七度ヤキ也

白芨 四両或五両

説53 右研為末水和撚作條如筋子大

陰乾燒之

右御方包紙上書に水戸ハと有

(七〇) 韓国古典籍総合データベース参照、韓国古典翻訳院、<http://db.itkc.or.kr/itkcd/mainIndexIframe.jsp>

(七一) 例えば神道家梵舜の日記『舜旧記』には、後陽成上皇(左記1・3)と後水尾上皇(4・5)について次の用

例が知られる。

1 院御所様へ御相伝之事 (四卷、一四八頁)

2 院御所様八雲之神詠口決相伝之切紙七箇条令清書 (四卷、二一五頁)

3 院御所様立柱 (七卷、八〇頁)

4 院御所様御鞠始之御遊 (八卷、二八頁)

5 院御所様御能 (八卷、六〇頁)

(鎌田純一校訂『舜旧記』四・七卷、鎌田純一・藤本元啓校訂『舜旧記』八卷。本文は八卷付録の索引より集成。史料纂集古記録編、八木書店、昭和五四・平成一年)

(七二) 例えば「衆香類集」は、「織田方」として次の薫物「紅梅」方65を載録する。

織田方

紅梅

方65 丁子 六錢目

白旦 四錢目

甘松 七錢メ

龍腦 壹錢五分

唐

茴香 五分五リン

生木香 壹錢五分五リン

梅花 二錢め

良香 壹錢二分

伽羅 壹錢參分

薰陸 二錢め

零陵香 壹錢壹分

以上 「(35丁表)

(七三) 三条実香・公頼父子による後奈良天皇への薫物伝授については、『言継卿記』天文二年(一五三三)一〇月条に次のようにある。

十九日、戊子、天晴、(中略)○当番之間七時分参内、青文御参、転法輪三条前左府、同大納言祇候、薰物黒方、調合御相伝、云々、夜半計退出候了、三獻参候、御陪膳三条宰相中将、青文、御前予、三条父子、前諸仲朝臣、季遠朝臣兩人也、三獻天酌也、初獻三条宰相中将、二獻予仕了、(高橋隆三ほか校訂『新訂増補 言継卿記』第一、続群書類従完成会、昭和四一年五月三十一日発行、二六二頁上段)

同じ『言継卿記』や『後奈良院宸記』、『御湯殿上日記』によれば、後奈良天皇は享禄三年(一五三〇)から天文八年(一五三九)までの間に薰物の調合、贈答を複数回行っている。(七四) 公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵藤浪乾々斎(藤浪剛二)書屋旧蔵「薰物之方」(請求記号:乾222)の処方。細川三斎方として、「若草」方5及び「黒方」方6を載録する。処方の詳細は調査中。(七五) 上田流和風堂(広島市)に収蔵される茶道上田宗箇流伝来の薰物書(「無題・薰物書」、請求記号:246)は、陽光院誠仁親王ゆかりの品として新作薰物「新枕」の次の処方を載録する。

新枕陽光院殿御方

一 沈香 四両
一 麝香 一分
一 薰陸 一両
一 丁香 二両
一 白檀 一両
一 貝香 二分
一 甘松 一両
一 生木香 一朱
一 藿香 二分
一 麝金 一朱

「(31丁裏)

新上東門院は慶長一四年(一六〇九)六月一六日に薰衣香

を片桐且元、貞隆に下賜したほか、翌年一〇月三日にも薰物を板倉勝重、片桐且元に与えている(「勸修寺光豊文案」、東京大学史料編纂所「大日本史料データベース」参照)。また、同一七年(一六一二)二月一二日には駿府の徳川家康に薰物を下賜している(「駿府記」、同上データベース参照)。東山御文庫所蔵「薰物調合秘方」(注一四)は、新上東門院の処方と明記して薰物「梅花」と「黒方」の方を一点ずつ載録。同書には他にも新上東門院の可能性のある「東」および「准后」と呼ばれる人物の処方が複数載録される。

(七六) 『御湯殿上日記』や『光豊公記』、『勸修寺光豊文案』等の記述によれば、後陽成天皇は在位中の天正一六年(一五八八)から退位後の慶長一十九年(一六一四)までの間に、皇族や宮女、徳川家康や豊臣秀頼を始めとした武家の有力者らに対する薰物の下賜を度々行っている。『言継卿記』慶長一〇年(一六〇五)九月一日条には、後陽成院が伏見の家康に対して「焼(薰)物方宸筆」を遣わされたと記されている(以上、東京大学史料編纂所「大日本史料データベース」参照)。

(七七) 山口県立大学日本史研究室ホームページ内データベース「実隆公記永正五年条の現代語訳(稿)」による語釈参照。<http://kohjizen.ypu.jp/newpage10.html> 最終アクセス平成二六年三月三日

(七八) 「萬方」(注二四)では、「三光院の名が「千種」「仙人」の銘の下に次の通り記載される。

上(絵柄)千種 勅方 三光院説云菊花ヨリ合セ出シタル方也

一 沈一両 二丁二分一朱^{○*}ヒカ
三貝三朱 四白三朱
五薰三朱 六宇一朱^輕星半分カロク

七廿一朱半 八麿一朱半

中三仙人

三条院 三光院説云是毛花ヲヨリ出タル也仙人ノ折袖
匂ヲ菊ノ露ノ歌ノ心也仙人ノ袖ニ移リタル菊ノ香ナレハ
イカニモホノカナルヘシ

「(7丁表)

一沈二両 二丁二分 加一分一朱

三頁一分二朱 三廿二朱 半朱ヒカ

四白二分 六薰一朱

七麿二朱大加一朱

(七九) 釈文と概要は拙稿「井伊直弼と三條家薫物秘説との関係について」(研究ノート、注八)を参照されたい。

(八〇) 「香具撰様調様」(注六六)には、三条西家の説を意味する朱筆の丸の記号を付された説として、次一文を始めとした諸説が記載される。

○三条家ニハ沈四両合ナラハ一両二分^{三ツハリ}ホトコ

キ沈ヲ粉ニシテトソノ外ハアサキ沈ヲ^{但日本ノ}コキニテモ常ノ

コトクキサミテ入也匂ハ同右キサミヤウハヨキホト 「(3丁裏)

ニホソナカクハリテセントウノハノカタノムネノ方

ヨリナガク紙ヲホウアテノコトクニシテツケテキ

ザメバハキヘチラヌ也但少ヒラメニウスキヲ口伝トス

沈ハタニツヲク右ノ匂ノヤウナルガアル也 「(4丁表)

(八一) 名古屋市蓬左文庫と徳川林政史研究所には、薫物に関する次の典籍が収蔵される。

名古屋市蓬左文庫

一、「匂袋法」、一冊、江戸時代中期写、請求記号：11-16

二、「薫物方」、一冊、鎌倉時代写、請求記号：108-52
三、「香合之記(安永六年)」、三冊、江戸時代中期写、請求記号：142-23

四、「香之書：掛香之方」、一軸、室町時代写、請求記号：162-14

五、「焼物調合法」、一軸、室町時代写、請求記号：162-15

徳川林政史研究所

六、「衆香類集」、一冊、江戸時代写、請求記号：36-5

七、「薫物之方」、一帖、書写年代未詳、請求記号：36-7

(八二) 前注四参照。四、五の翻刻は拙著『薫集類抄の研究』附・薫物資料集成』(注二)に掲載。

付記

本稿の執筆に際しましては、公益財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所より貴重書の閲覧、撮影の許諾、ならびに翻刻掲載の了承を賜りましたことを始めとして、関連する資料の所蔵先であられる施設、団体、個人からも御高配を賜りました。また、所属する学会、研究会におきましては、諸先達より貴重な御意見、ご鞭撻の数々を頂戴して参りました。改めまして、心より御礼申し上げます。

なお、本稿は公益財団法人武田科学振興財団による二〇一三年度「杏雨書屋研究奨励」採択研究課題「杏雨書屋所蔵「薫物之方」に見られる近世初期における薫物文化の伝承と実相、変遷についての文献学的研究」(研究代表者：田中)の遂行により得られた成果の一部を論文化したものです。

凡例

一、公益財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所旧蓬左文庫所蔵史料「薫物之方」（請求番号三六―七、写年未詳、折本一帖、縦一六・三cm、横九・四cm）の全文を翻刻した。

一、右の書誌は、公益財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所ホームページ（平成二六年三月三十一日最終閲覧 <http://www.tokugawa.or.jp/institute/>）に掲載される「旧

蓬左文庫所蔵史料目録（上）」（『徳川林政史研究所研究紀要』三四号、一―六三頁、平成二〇年三月発行）と、稿者が平成一九年八月八日に行った原本閲覧時の実測結果に基づく。

一、本文の字配り、行配りは底本のままとした。

一、表紙、裏表紙を含む各紙面の翻刻末尾には、次の要領でその位置を示した。

（例）表紙 〓 「（表紙）

表紙の内側 〓 「（表紙内）

第一丁の表 〓 「（1丁オ）

第一丁の裏 〓 「（1丁ウ）

一、記述のうち薫物の処方と調合の説については、冒頭からの掲出順に、次の要領による通番を頭書した。

（例）薫物の処方の第一番目 〓 方1

薫物の調合法の第一番目 〓 法1

一、説は、処方に対して行・段落を独立して記述される場合に、主要なものを見なして通番を付した。

一、底本の古体・異体・略体字は、「ふ（より）」を除いて適宜正字体ないし通字体に改めた。

一、底本の変体仮名は、すべて通行の書体に改めた。

一、仮名遣いの「ん」「む」の表記は底本のままとした。

一、反復記号「ゝ」「く」は底本のままとした。

翻刻

せんりうしのほうわうの薫物之方也

薫物之方

黒方

方1
沈香

八兩
ヲモシ

「(表紙)

丁子

三兩
同

貝香

壹兩二分
カロシ

白檀

三分
同

「(1丁才)

薫陸

同

麝香

壹兩

六兩合

方2
沈香

六兩

丁子

貳兩老分

貝香

壹兩二朱

白檀

壹分二朱

「(1丁ウ)

薫陸

壹分二朱

四兩合

方3
沈香

四兩

丁子

壹兩二分

貝香

三分

白檀

壹分

薫陸

壹分

貝香こしらゆるやう

「(2丁才)

説1 一日一夜酒にひたしてつきの日いかにもよく

あらいて後にくもりなくうすくこそけて千

どまたあらいてあまつらをうすくつけてあふり

てまたあらいて又あふりてこすへし

あまつらせんするやう

説2 火をぬるくとうすみて石なへにてねる事も

有またあまつらをちやはんにてゆせんにする

もよし其後つめたくなしてはしにてひき

あけみれは三寸はかりつゝきたるかよき也

八條式部卿宮ノ方

「(2丁ウ)

方
4

黒方

沈香

四兩

丁子

壹兩三分

└ (3丁才)

貝香

壹兩二分

薫陸

壹分かるし

麝香

貳分

白檀

壹分かるし

梅花

方
5

沈香

四兩

丁子

壹兩壹分

└ (3丁ウ)

甘松

壹分二朱

貝香

壹兩二分

白檀

貳朱

六
麝金クンロクイルレハ四

壹分

麝香

壹分

菊花

方
6

沈香

四兩

└ (4丁才)

丁子

壹兩三分

貝香

壹兩壹分

薫陸

壹分

甘松

貳分

麝香

貳分

侍従

方
7

沈香

四兩

丁子

壹兩壹分

貝香

壹兩壹分

甘松

壹分

麝金

三分

是はこゝろより外にちらさぬ方也

黒方

方
8

沈香

四兩壹分

丁子

壹兩三分

貝香

三分

薫陸

四朱

白旦

四朱

麝香

壹分四朱

└ (5丁才)

└ (4丁ウ)

方 9	沈香	四兩	「（5丁ウ）	梅花
	麝香	壹分三朱		
	甘松	三朱		
	貝香	壹兩三分		
	丁子	壹兩壹分		
	薰陸	三朱		
	白檀	壹分壹朱半		
	麝香	壹兩		
	侍従			
方 10	沈香	四兩		
	丁子	貳兩		
	貝香	三分		
	麝金	貳朱		
麝香	同			
	荷葉			
方 11	沈香	三兩三分		
	丁子	壹兩壹分		

方 12	沈香	四兩 <small>少おもし</small>	「（7丁オ）	
	貝香	壹兩 <small>同</small>		
	白檀	壹分 <small>かろし</small>		
	はくさみの方			
	方 13	沈香		六兩
	丁子	三兩		
	貝香	貳兩二分		
	薰陸	三朱		
白檀	二分三朱			

麝香

壹分三朱

合スル次第

説3

沈ノウヘニ薰陸ト貝香ト合其上ニ白旦ツキニ丁子

ヲ合ハテニ麝香半分入テ半分ハ上にサス也

方14

沈香

壹兩 おもし

丁子

二分 かろし

貝香

壹分 ヂンヨリカロク
丁子ヨリヲモク

白旦

壹分 カロシ

薰陸

同 ヲモシ

麝香

二キ カロシ

又ノ方

方15

沈香

壹兩二分

丁子

貳分

貝香

壹分三朱

白檀

壹キ

薰陸

二朱

麝香

壹キ

又ノ方

「(9丁オ)

「(8丁ウ)

方16

沈香

壹兩 ヲモシ

丁子

二兩一分かろし
貳分三朱

貝香

壹分三朱

白旦

壹分三朱 カロシ

薰陸

貳朱 カロシ
白旦ヨリヲモク

又ノ方

方17

沈香

貳兩

丁子

壹兩 カロシ

貝香

貳兩 カロシ

白檀

三キ

薰陸

三キ

薰衣香

方18

沈香

四兩

丁子

一兩

貝香

二兩

線香

三兩

白檀

二朱

麝金

二朱

「(10丁ウ)

「(10丁オ)

「(9丁ウ)

麝香 二朱

又

方19 線香 四兩

丁子 二兩

麝香 二分

薰陸 一分

白檀 一分

小侍従ノ方

方20 沈香 四兩

丁子 二兩

貝香 一兩

白檀 一兩

薰陸 一分

麝香 二分

合する次第

説4 まつ沈香丁子をあわせて半分わけ

おきてその半分にしやかうをかきあは

せていま半分をかきひろけてへちに

「(11丁オ)

「(11丁ウ)

貝香の上に白檀其上に薰陸をあ

わせてしやかうあはぬ半分に又かきあわ

せてその上にしやかうあわせたるをか

きあはすへしさて後に合二度

ふるふへし

合つきの事

説5 三千つくへし左右にかへてつくへ

しかうのかはらんたひにかねうすかな

きねあらふへし貝香いかにもくよく

こしらへへしあまつらよくこしらへ

へしあまつらをきぬにてよくこすへし

しろかねの物にしたみ入てよくしつして

せんすへしすみの火よくおこして一ひ

さけにはい一かわらをはかりはいふるひ

かけてめてたううつくしくうつみて

又ひさけのしりに火のあわひ三すは

かりあるへし七日七夜ほとせんする

なりよきあまつらははしにかけて

「(12丁オ)

「(12丁ウ)

「(13丁オ)

入物のきはひきあくれはからかねのやう
にほそくてきれすかみなどをふたにして

ちりほこと入すあわするによきち

ふんは二三月花のさかり秋は八九月

さてうつむによき時分は春は五日

夏は三日秋は七日冬は十日梅の木

下にうつむへし雨いる用あらははき

の下の土を物にとり入てたき物を

ちやはんのつほ入てうつによしたき

物の方おほけれども此世におほかるは

何にかせむ

黒方

方
21
沈香

四兩

丁子

二兩

麝香

二分

貝香

一兩二分 壹兩ニテモ

薰陸

壹分

白檀

壹分

「(14丁ウ)

侍従

方
22
沈

四兩

丁

二兩

貝

壹兩

麝
ナクハ麝
ヲ入ヘシ

壹分二朱

甘

壹分二朱

梅花

「(15丁オ)

方
23
沈

八兩

丁

三兩三分

線

壹分二朱

貝

三兩

甘

壹分

白

三分

薰陸

壹分

麝

二分

「(15丁ウ)

梅花のすくなくわかちたる

方
24
沈

二兩

丁

壹兩壹分
ヲモシ

線 壹朱

貝 三分カロシ

甘 壹朱
「(16丁オ)

薫 壹分

白 壹分

麝 二分

荷葉ノ方

方25 沈 三兩三分

丁 壹兩壹分

貝 壹兩壹分
「(16丁ウ)

白 壹朱

甘 二朱

シウコン 壹分 白シヤカウ

春ハ梅花夏ハ荷葉

説6 蓮の香によそへたる侍従は秋風すゝしく

てこゝろよきおりによそへたる黒方ハ冬

さむくさしたるにふかくある匂ひなるへし
「(17丁オ)

薫物合やう

説7 あまつらせんする事ものしてかきあくれば

山すけの八重たゝみのやうにたゝなはりて

入る程にせんすへき也火をうつみてかねの

わの上にすへてせんすへし貝香あふる事

よき酒にひたしてけふの午の時はかりにすり

あけてかたなにてむらなくはたけてあま

つらのせんしたるをいとうすくぬりてよき

かみにしきて火をうつみてあふるへき也つ

たへし黒方にはすくすましせうわのみ

かとの伝にはおのこのみるには夏たへはとて

しけのいのないしのかみの方には八才斗の女

のきぬをきてつかんにこをらぬ程につけとあ

るはやはらつくへきにやそれは千つきの事

「(18丁オ)

ならんかうともをさつかは沈丁子などはせん

かうのかはりに麝香入候事はきんたゝのやう

なり 薫物よく合する人はきんたゝのへん

ないしのすけのつたへ也ゆきときは八条の

式部卿ノ宮のそん也ふるいとあるはうすものかとり

のほとにてふるふへきにやあらんゆをわかし

て物に入てあまつらをへいしに入てくち

をさて三日はかりせんしたるをとくすく

方にはありうつむ事は梅の木の下花た

ちはなの下五葉のした水のほとりせうわの

みかとのうこんの御川水のほとりにうつませ

給けり其所はかはらてと有^す三日と有方あり

侍従と黒方とは七日也土のふかさ八寸とあり

また二尺はかり程ほる夏は三日と有方あり

秋冬は五日ちやはんのつほに入ゆたんにつゝみ

てうつむへし

又ノ方

方
26
沈

四兩
ヲモシ

丁

二兩
カロシ

貝

一兩
沈ヨリハカロク
丁子ヨリハラモシ

麝

二分

「(19
丁ウ)

合次第

説8 沈の上に薫陸貝香を合せてつきに白

檀つきに丁子はてに麝香半分はこま

かに合せて半分は合つきのときたすなり

いはぬ本か方なり

説9 合やうあまた有ひとつのやうはくし箱

のふたをわたにてよくぬくいて沈をよる

かうかいのさきしてなりとも鳥のはして

なりともむらなくかきひろけてむめの木

をかたなのはのことくうすくけつりてかた

しのこのやうにわりてしたいのかうともを

方のまゝにおくへし薫陸あはせん時

はこゝろへへしことかうはさもなきにくん六は

かならずはこのふたにつきてあしければ

つけしとすへし

又ノ方

説10 まつすくなき香ともを方のまゝに合之

て沈をおなしやうにかきあはせくする也

又ノ方

「(20
丁ウ)

「(20
丁オ)

説 11 沈をかきひろけて次第に入てかき合

するやうくきくゝの香おなし色なりて

よくたひくゝにかき合すへしあまつら

入てよくあらいておよひにてつかみまつるや

う有御くらのことねりつねふんかいひふる

は手のあかのつくとてきもせぬも有梅木

のすりきつくりてよくくゝつき合せん二由

あまつらいるゝ程少かたきかたによりたるか

つけはよきなり

夏は合するかたきかよししるくゝと成なり

冬は少しるけれども又の日はかたまるなりあま

つら入たるによき程はおよひのかたすしの云也

貝かうはあふりてつゝみておきたるかわろし

酒の香のするなりあたらしくあふりてあ

はすへしはかりめよくくゝしりてかくるやう

すゝしの糸のほそくよりてめの上にいとを

かたよせすしてかたはかりをさけもあけても

もてはりやうめたかふそれかしきたさにひぢ

「(21丁オ)

「(21丁ウ)

「(22丁オ)

をあけてはかりそのさけをひかへてもつへし

もとをひかへてもてはりやうめたかふかけかこ

は三つすきのやうになかへのよくうすしてすみ

すみをきりてつゝむへしかたくつゝめは

りやうたかふあはぬ程にうけてつゝむへし

合つき四兩合三千きね二兩合千五百

きね一兩合千きね合つきは半分つきて

かきあはせて又うちけして今半分のかす

をつくへしかなうすにきねのあたらぬはかな

くさきなりつきひろけたらんをつねに物

してかきあつめくゝむらなくおなしやうに

つるすへし白たんのよきはきね有てあ

かまぬをよしと云ひの木の色なるわろし

いかなるもこゝろへ見るへしかうはしきを

よきとすへし薫陸もかくみるへしに

こりたるもまじる也是を能^すゑりてよ

色きよらなるよきしみてくろき所有

て松やにゝにたるわろしきりとてこはくの

「(22丁ウ)

「(23丁オ)

色なるはかたければあはせまほしからんになにも

「(23丁ウ)

かもよくゑらひて合すへし黒方は麝

香すきたるかうはし侍従は麝香入すくし

たる中／＼わろしかうはおほけれどもみしる

事かたしそうもかうといふはきのふしに／＼たり

甘松はけいものはにふたりけは麝香丁子

のふしなりうこんくさ／＼ありうこんはむら

さきのくちたるににていとかうはしき也

「(24丁オ)

うこんはまつたちてこゝろのやう也

くろうこんははしかみをほしたるやうにてわり

たれはきくちはのふかくつゝみたるにとく

なりたき物合は目すきてたくそかうはし

きひせんはよろしういてきてすなこの

やうになるも有あまつらはゆせんかよきなり

みなかうともをこと／＼に三にふんか事か

よはさてふるいをへち／＼にしてつきふ

「(24丁ウ)

るいて後方のかくれたるまゝに次第／＼に

かき合てあまつらにあはすへし貝香

はよき酒に一夜程はかしてさい／＼うす

くときよくこそけてあまつらのせんし

たるをぬりて火をぬる／＼としてはら／＼

とこかさてあふるへしあまつらはものして

したみてかねのひさけしてかとふすへし

四五日火をぬるくしてあはいてきぬ程

にかたむへしはしにつけてあくれば三

尺はかりほそくてきれぬ程にかたむへし

荷葉

方27 沈

三兩三分

丁

二兩二分

甘

二朱

白

一朱

貝

一兩壹分

麝

一分

苦練香

以上

二朱

方28 甘

十一兩

「(25丁ウ)

「(25丁オ)

侍従	麝	薫	白	貝	丁	方 29 沈	ちよくやう光源院 黒方	良香	桂心	木香	セウ腦	タイキヤウ	川芎	トウキ	シヽキヤウ	藿	丁
	二分	一分	一分	一兩	二兩	四兩		五兩	二兩	五兩	二兩	同	同	五兩	五兩	同	同
				┌ (27 丁才)							┌ (26 丁ウ)						┌ (26 丁才)

ソノ 薫陸ノ事	白	丁	方 32 沈	近衛サマ 黒方	麝	薫	貝	白	丁	方 31 沈	小倉	麝	藳	甘	貝	丁	方 30 沈
一分二朱	三分	一兩	二兩		二分	一兩	一兩	一兩	二兩	四兩		一分	一兩	一分 カロシ	一兩	二兩	四兩
┌ (28 丁ウ)																	┌ (27 丁ウ)

方 34	方 33
沈	沈
丁	丁
白	白
貝	貝
麝	麝
甘	甘
セ ント ウ	若 草
黒 方	

三 朱	一 分	一 分	二 分	一 兩		二 分	二 朱	三 分	二 分	一 兩	一 兩	壹 兩 二 分	五 兩		三 朱	三 朱	二 分
--------	--------	--------	--------	--------	--	--------	--------	--------	--------	--------	--------	------------------	--------	--	--------	--------	--------

┌
(29
丁ウ)

┌
(29
丁才)

方 37	方 36	方 35
沈	沈	沈
丁	丁	丁
白	白	白
薫	薫	薫
貝	貝	貝
麝	麝	麝
又 ノ 方	中 殿 方	公 方 様 ノ 方
二 兩	三 兩	二 兩
四 兩	一 兩 二 分	一 兩
二 分	一 分 二 朱	三 分
二 分	一 分 二 朱	一 兩
一 兩	一 分	二 兩
三 分		ミ セ ケ チ 一 分 二 朱

┌
(31
丁才)

┌
(30
丁ウ)

┌
(30
丁才)

麝	貝	薰	白	丁	方 39 沈		貝	麝	薰	白	丁	方 38 沈		貝	麝	薰	白
						又ノ方							又ノ方				
一分二朱	二分二朱	三分	三分	一兩二朱	三兩		二兩	二朱	一兩	一兩	二兩	四兩		一兩	二朱	一兩	一兩
						ㄣ (32 丁才)							ㄣ (31 丁ウ)				
麝	薰	白	貝	丁	方 42 沈		甘	麝	貝	丁	方 41 沈	麝	貝	白	丁	方 40 沈	
						勅方黒方											五兩合
二分	一分	一分	一兩	二兩	四兩		四朱	四朱	三分	一兩一分	二兩一分	二分二朱	三分三朱	一兩一分	二兩二分	五兩	
																	ㄣ (32 丁ウ)
											ㄣ (33 丁才)						
							</										

勅方	射	青木香	霍	薰	桂	白	貝	丁	方 44	新枕	麝	白	薰	貝	丁	方 43	勅方
									沈							沈	
	二朱	一朱	三分	二分	三分	三分	三兩	三兩一分	六兩		一分	同	同	同	二兩	四兩	
	ㄥ (35丁才)															ㄥ (34丁才)	

甘	薰	白	方 47	麝	薰	甘	白	丁	貝	方 46	麝	白	薰	甘	沈	方 45	加羅 ^マ
			沈							沈						加羅 ^マ	
			富士														
一兩	一兩一分	二兩一分		八匁八分七リ	九分三リン	九分三リン	一匁八分七リン	六匁二分五リン	七匁五分	貳拾目	一分	同	同	同	八匁	十六匁	
					ㄥ (36丁才)											ㄥ (35丁ウ)	

生 ^マ 木	霍	白	貝	丁	方 49 沈	麝	四 薰	五 白	三 貝	二 丁	方 48 沈	樟 腦	麝	貝	丁
					新 枕						山 人				
一 朱	二 分	一 兩	二 分	二 兩	四 兩	二 分	二 朱	二 朱	二 分	一 兩	三 兩	七 分 五 リ ン	三 匁 五 分	一 兩 二 分	三 匁
			「 (37 丁ウ)						「 (37 丁オ)						「 (36 丁ウ)

甘	白	霍	貝	丁	方 51 沈	麝	甘	貝	丁	方 50 沈	甘	薰	麝	薝	桂 心
					荷 葉					勅 方 梅 花					
一 分	一 分 一 朱	一 分 一 朱	二 兩 一 分	二 兩 二 分	七 兩 三 分	二 分	二 分 一 朱	一 兩 三 分	二 兩 一 分	四 兩 一 分	一 分	一 兩	一 分	同	同
「 (39 丁オ)												「 (38 丁オ)			

方 69 沈		麝	麝	貝	丁	方 68 沈		麝	白	薫	貝	丁	方 67 沈		薫	麝	丁	
	黒方						侍従							黒方				
四兩		一朱	三朱	三分	一兩	三兩		二分	一分	一分	一兩	二兩	四兩		一分	二分	二兩二分	
	┌ (48 丁才)						┌ (47 丁ウ)							┌ (47 丁才)				
方 71 沈					説 12	麝	薫	丁	貝	白		方 70 沈		麝	貝	薫	白	丁
	山人	五兩入也	あらく大きなるをは又きさみて	ふるひにてこまかなるをさり入ふ也	右沈香のはりやう射のことくにきさみ								新枕					
五兩						五分	三分	二兩	四分	二兩	五兩			三分	二分	三分	一兩二分	二兩二分
					┌ (49 丁才)								┌ (48 丁ウ)					

木	方73 甘		貝	薰	甘	丁	白	方72 沈		龍	麝	貝	薰	甘	白	丁
一分	二分	勅方掛香ノ方	一分	一分	一分	三分	三分	三兩	春之夜	一分	一分	四分	四分	二分	一兩	一兩二分
		蜜に龍腦三りん程入也														
		┌ (50丁ウ)						┌ (50丁オ)								┌ (49丁ウ)

方
75
龍

二分

甘

二分

白

一分

丁

一分

麝

二分

同方

方
76
麝

一兩

龍

一兩三分

丁

一分

白

一分

甘

七分

薰

四分

松脂

三分

沈

五分

菊花

三分

樟腦

四分

ねみたれかみ

方
77
甘
ホシヨクアライ酒ヲウチカケボシ

十一兩

「(52丁ウ)

「(53丁オ)

シンイ 花共ニコクチキサミ 十一兩

チウカウ コマカニキサム 九兩

白 コクチキサミ 九兩

ハイサウ ヨクアライサケヲウチカケホシ 十一兩

サンナイ コクチキサミ 四兩二分

大ワウ 内 五兩二分

麝スル 二兩

龍スル 一兩二分

酥油 二兩二分

説14 右大わういづれも七種よくませて後あ

らきもじにふるいわけこまかになるふん

に麝香龍のふを合其後酥油を入也

ましりかね候物也候まゝよくもみあはせ

候也

院御所様御方

方
78
丁 一分半

麝 二分

甘 二分

「(54丁ウ)

「(54丁オ)

方 80
伽

龍 木 藿 丁 甘

西三条殿方

方 79
丁

龍 麝 甘 木 白

八條様方

白 龍 伽羅

一兩 一兩 三兩 三兩 三兩 三兩 三分 五分 一分 二分 二兩 二兩 一分 一分 一分

「
(55
丁ウ)
」

「(55丁才)」

生木	甘	龍	方83 白	山桜	藿	カウブシ	白	薔	甘	丁	方82 苺	りんちやうき	樟	薫	五分	茴	龍	方81 丁
二朱半	三朱	三朱半	一分		一分	一分	一分	二分	二分	一分二分	二兩		一朱	二朱	五分	三朱	三朱	三朱半

「57丁才」

「
(56
丁ウ
)

「56丁才」

ニクツク	良	片	白	龍	丁	茴	方 85 麝	手枕	麝	甘	茴	龍	方 84 丁	すみやくら	茴	薫	麝
							二分						三分				
三朱	三朱	五朱	二分	二分	二分	二分			三朱	同	五朱	一分			一朱	二朱	三朱
							ㇿ (58 丁オ)										

薫	片	レイリヤウカウ	梅花	龍	麝	白	阿仙藥	甘	良	生木	方 86 丁	ねみたれかみ	木	樟	甘	薫	レイリヤウカウ
二朱	二朱	三朱	三朱	三朱	三朱	二分	二分	二分	二分	二分	二分半		二朱	二朱	二朱	二朱	三朱
			ㇿ (59 丁ウ)								ㇿ (59 丁オ)						
																	ㇿ (58 丁ウ)

方 88										方 87									
薰	白	藿	甘	丁	龍	麝	沈	丁	白	甘	龍	麝	又ノ方		ニクツク	木	茴	安息	
一匁	一匁五分	七分	一匁五分	一匁六分	七分	八分	一分 <small>ヨニヌ</small>	二分	三分	一兩	二朱	一朱			二朱	二朱	二朱	二朱	
┌ (61丁才)										┌ (60丁ウ)									
<hr/>																			
方 90										方 89									
茄	丁	白檀	甘松	梅花		茴	龍	麝	片	薰	良	丁	安息	安仙葉	白	青木	クハツカウ	木	甘
一分	一分	一分二朱	二分			二朱	同	一分二朱	二朱	一分	三朱	同	同	同	一分	三朱		一分	二朱
┌ (62丁才)										┌ (61丁ウ)									

梅ニ

「(62丁ウ)

説14 但二年酒盃に一ツ入甘松を土をよく

ぬくい其まゝ入はやくとりあけまた

二番の白水を盃に二ツ半分入右の

ことく甘松をいれ其まゝはやくとり

あけかけほしにして二分程にきさむ

勅方

方91 甘 二分

「(63丁オ)

白 二分

院ノ御所様御方

方92 麝 二匁

龍 同

木 一匁二分五リン

生 同

良 同 「(63丁ウ)

薫 同

安息 同

丁 同

阿仙 同

白 三匁

片 二分五リン 「(64丁オ)

方93 沈 其マヽコス 三匁五分

丁 三匁五分

白 三匁

薫 二匁

甘 酒ニテアラフ 四匁

龍 三匁

麝 三匁五分 「(64丁ウ)

藿 二匁 スナヲアラフ

安息 三匁五分

松脂 二匁

茴 二匁

酥油 二匁

梅花

方94 甘 三匁 「(65丁オ)

丁 一匁

方
96
酥

大石方

酥

茴

松

安息

藿

麝

龍

甘

酒ニテアラク

薰

白

丁

方
95
沈

其マヽコニス

菊

薰

白

龍

壹匁

二匁

二匁

二匁

三匁五分

二匁
スナラ
アラフ

三匁五分

三匁

四匁

二匁

三匁

三匁五分

三匁五分

一匁

五分

一匁

四分

「
(66
丁オ)

「
(65
丁ウ)

方
97

甘

藿

トウリ

タイキヤウ

良

ニン／＼キヤウ

丁

センキウ

大莫

甘

サンナイ

龍

シンイ

木

麝

白

丁

ハイサウ

拾両

十一兩

五兩

同

五兩

同

十一兩

五兩

十匁

二拾目

五匁

五分

拾匁

四匁

壹匁

拾匁

拾匁

同

「
(67
丁オ)

「
(66
丁ウ)

「
(67
丁ウ)

二
匆

三兩

三分

一兩

三分

二分

一兩

一兩

二分

一兩

二分

同

同

壹分三朱

二分

「
(69
丁才
)

「
(68
丁ウ)

「
(68丁才)

壹分

同

三朱

壹分

三朱

壹分

同

壹分

二朱

壹分三朱

二朱

已上十三種

説
15

口傳云香具をよく匂らひ匂ひにまけ

かちなくつよき匂ひを用られ候事

第一にて候藥種はいつれも細にきさみ

白檀などもうすくけつり也右十三種

をよく取合袋壹つに入也袋大きにて

取分られたき事はいかほとなりとも

「70丁才」

「(69丁ウ)

御心次第にて候取分られ候へは匂ひうすく

成物にて候龍麝などはかならずかへられたる

はよく御惣別分兩は如此候唯いく度も

候御調合は煉熟は聞つからかへたき

匂ひも有また滅度も候事の吟味の

上にてそ申侍て候

又方

方
100
麝

二兩

龍

一兩

甘

貳兩

白

同

丁

一兩
少ヒカエテ

樟

少

已上六種

説16 右之方は調合早速のためにて候也龍麝の

匂ひのみ甚しくしてさしたるふしもなき

匂ひにて候調合之様は右同前

アへ掛香

「(71丁ウ)

「(71丁オ)

「(70丁ウ)

方
101
木香

三朱

丁子

壹兩

甘松

同

薰陸

三朱

白旦

一兩

右近^マ

同

ハイサウ

同

ウイカウ

二朱

龍腦

二兩

麝香
但龍麝ハ壹兩ヒカヘテヨシ

同

藿香

壹兩

反腦

二朱

苾羅

三兩

良香

二分

安仙葉

三分

勅方

方
102

甘
水ニテアライカケホシニバ少サマシホヲフク

二匁

「(72丁ウ)

「(72丁オ)

阿	甘	白	薰陸	丁	龍	麝	方 116 加羅	酥油 <small>四色にてむす</small>	蠟	●白	大茴香	●甘松	●阿仙藥	●安息	麝	方 115 アンヘル
同	同	同	同	三分	同	同	壹兩二分	同方	卅目	一分半	五リン	二朱	二分	一分	壹兩	二分
											「 (83 丁ウ)					

方
118
枸杞朮

五兩

花水之方

ライクハン

卅目

「
(85
丁ウ)

アンヘラ

壹朱

龍

三匁五分

方
117
麝

右粉に、此あからる
ねり合用也

壹兩

兵部卿ノ方

して竹のさきをとからかしあなをあけ申候

入て少さましてまろくかためしはらく

入ねり合てよき時、ぬり物、箱のふたに

「
(85
丁オ)

ろうと壹つにかき合て右ノ粉合をうち

ろうことくくつけて後からの脂を入

蠟をけつりうす物に入て火にかけて

粉合をしてよくくかきませて其後

説
19

右いづれも細抹にして紙のうへにて

唐蠟

五兩許

加羅脂

壹兩

「
(84
丁ウ)

安息

同

甘松	壹兩	
白	三兩	
麝	二朱	
荊棘花	壹兩	
枇杷皮	同	「(86丁オ)
母丁子	二兩	
龍	二朱	
麝	壹朱	
加羅	壹分	
說 20	右十味如焼酒取	
第一橘花第二久年母花第三荊棘花		
いつれも生なき時取		「(86丁ウ)
如取焼酒也		
其香如梅花		
右三色はおほく入たる程よく候		
方 119	龍	五分
麝	八分	
ハヲシロイ	同	「(87丁オ)

トウノツヽチ	二兩	
右コニ		
甘	壹兩	
白	二兩	
丁	二匁	
說 21	此三色をきさみせんして右こにしたる三色ごまのあふら三兩唐蠟二匁程入	「(87丁ウ)
ねりきぬにてこし用也蠟はかけんし		
たい		
伽羅之油之方		
方 120	唐蠟	五拾目
杉ヤニ	拾五匁	
右杉やにらうと合せんしこす也		
丁粉	三兩三分	「(88丁オ)
甘粉	同	
白	同	
說 22	右三種蠟ノ内へ入湯せんしてこす也	
龍	同	壹分二朱

木ノ實ノ油三合せんしてらうの内へ

入よくく合候様にしてさまし用也

ニツケイ 三兩三分

「(88丁ウ)

薰物方 梅花

方121 沈香 四兩

詹唐 三分三朱

貝香 一兩三分

甘松 三朱

白檀 一分一朱半

丁子 一兩一分

「(89丁オ)

薰陸 三朱

麝香 一兩

荷葉

方122 沈 三兩三分

丁 一兩一分

甘 三朱

貝 一兩一分

「(89丁ウ)

藿 三朱

白 二朱

麝 一分

鬱金 一分

安息香 一分

菊花

方123 沈 二兩

丁 一兩

貝 二分

白 一朱

薰 一朱

麝 二朱

侍従

方124 沈 二兩 「(90丁ウ)

丁 三分

貝 二分

白 二分

薰 二分二朱

甘 二分

投稿論文執筆要領

- ◇ 「薫物書の研究」への投稿資格は会則に記載した通りです。
- ◇ 投稿は未発表のものに限ります。
- ◇ 投稿論文は三部提出してください。
- ◇ 投稿論文の文字数や図表、写真の枚数に制限はありませんが、A4用紙に縦組二八字、二五行の二段組にて紙面を作成してください。
- ◇ 図版、写真、翻刻等の掲載申請は投稿者が行ってください。
- ◇ 投稿論文の要旨を四〇〇字程度にまとめて三部提出してください。
- ◇ 本文、要旨とは別に、住所、氏名、所属（職名）ならびに投稿資格に係る研究業績一覧を記入した用紙を三部提出してください。
- ◇ パソコンを使用した場合は、文書ファイルをUSBメモリー等一点に保存して提出してください。
- ◇ 投稿論文一式（USBメモリー等も含む）は事務局宛に必ず簡易書留にて郵送してください。一式の返却はいたしません。
- ◇ 採用された投稿論文の執筆者校正は、三校までとします。
- ◇ 投稿論文の執筆者には、発行時に電子データ公開先のURLを通知します。

編集後記

薫物書研究会の発足とともに発行しました「薫物書の研究」創刊号には、〈新作薫物〉の紹介を主体とした内容による論文一本を掲載しました。執筆は、会の発起人であり代表に事務局も兼ねる私こと田中が行っています。文表現も論述も稚拙で未熟なものとなってしまう、悔やまれて仕方ありませんが、この分野の基礎研究の進展にいさかなりとも寄与するものとお認めいただければ幸いに存じます。

本会の発足にあたり、学校法人広島女学院内部監査室長（広島県庁OB）の宮原洋治氏に監事としてご参加いただきました。宮原氏は、大阪大学法学部在籍中に故犬養孝博士の講義を履修して文学の楽しさに目覚めたという生粋の「文学青年」で、薫物を始めたとした日本文化への関心も高い人物です。本会の趣旨にご賛同くださりつつ、運営状況についてきびしく監督していただけるものと拝察します。

会員や執筆者の積極的な勧誘および会費の徴収は行わない考えです。発行回数を重ねて長い年月の経過した頃に、本誌が同好の士にとり身近で信頼に足るものとなっているよう、精進して参ります。ご指導、ご鞭撻の程賜りますようお願いいたします。（田中）

二〇一四年四月一四日発行 無料公開

薫物書の研究 創刊号

編集兼発行者 薫物書研究会 代表 田中圭子
発行所 薫物書研究会事務局

〒七三九・〇六一一

広島県大竹市新町一丁目八・一八・二〇四

e-mail: misima17@hotmail.com